

千里丘遺跡

千里丘駅西地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和 6 年（2024 年）3 月

摂津市教育委員会

千里丘遺跡

千里丘駅西地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和 6 年（2024 年）3 月

摂津市教育委員会

序 文

本報告書は、令和 5 年度に実施した、千里丘遺跡の埋蔵文化財発掘調査成果をまとめたものです。

千里丘遺跡は、平成 17 年度から平成 21 年度にかけて都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に先立ち、大阪府教育委員会により発掘調査が実施されました。これらの調査の成果としては縄文時代の石器集積から古代・中世の耕作跡や掘立柱建物、近世以降の耕作跡に至るまで、長きに渡って、この地域に人々が生活していた痕跡が残されてきた事が分かりました。

今回の調査は、千里丘駅西地区再開発事業に伴う発掘調査です。

摂津市北部に位置する JR 千里丘駅西地区は、JR 京都線で新大阪駅から約 10 分、大阪駅から約 14 分、府道大阪高槻京都線及び府道正雀停車場線に囲まれた交通の要衝です。

しかし同地区内は利便性の高い土地であるにも関わらず良好な土地利用が図られていませんでした。

この課題を解消するため、平成 31 年 3 月に策定した「再開発基本方針」において駅前広場整備を含む再開発事業による交通結節機能の強化、計画的な土地の高度利用による災害に強い良好な住環境形成、都市機能の充実による駅前にふさわしい集約的な拠点形成を図ることなどを整備方針として掲げております。再開発事業が進む中、今回の発掘調査が実施され、その成果を今回の報告書としてまとめました。

今回の調査では、建物跡の発見はありませんでしたが、江戸時代以前から近代にかけての千里丘陵を削り平らにしていく耕地化の跡が発見されました。

耕地化の後、昭和 13 年に JR 千里丘駅が開設されて以降、宅地化が進み現在に至ります。

また、古墳時代から江戸時代にかけての遺物や縄文時代の石鏃などが出土しました。また明治時代以降の生活道具が比較的良好な状態で発見されました。

本報告書が、市内の歴史を明らかにする一助となり、市民の皆様にも広く活用され、文化財に関心を抱く契機になりましたら幸いです。

最後に今後とも摂津市の文化財保護行政にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和 6 年 3 月

摂津市教育委員会
教育長 箸尾谷 知也

例　言

1. 本書は、摂津市教育委員会が令和5年度に実施した、大阪府摂津市千里丘1丁目に所在する千里丘遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は千里丘駅西地区再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。現地調査及び整理調査は、摂津市教育委員会の監督の下に株式会社島田組が行った。

【委託事業名称】 千里丘駅西地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託

【調査面積】 480m²

【委託契約期間】 令和5年6月19日～令和6年3月15日

【現地調査期間】 令和5年7月18日～令和5年10月30日

【整理調査期間】 令和5年10月30日～令和6年3月15日

3. 現地調査及び整理調査は下記の体制で実施した。

【摂津市教育委員会】

摂津市教育委員会 教育長 管尾谷 知也

摂津市教育委員会 教育総務部 部長 安田 信吾

摂津市教育委員会 教育総務部 生涯学習課 課長 千葉 郁子

摂津市教育委員会 教育総務部 生涯学習課 課長代理兼まちづくり係長 西川 麻野

同担当者 副主査 伊部 貴雄

【株式会社島田組】

株式会社島田組 現場代理人 服部 智明

株式会社島田組 調査員 重金 誠 安川 賢太

株式会社島田組 補助員 安達 俊一（現地測量担当） 柳島 理奈（遺構図面編集担当）

株式会社島田組 補助員 出口 まゆみ、藤中 貴子、井上 亮一（整理作業担当）

4. 株式会社島田組の担当は以下のとおり。現場の発掘調査は重金が、測量は安達が、写真撮影は、遺構撮影を重金が、遺物撮影を井上が行った。報告書作成および編集は出口、柳島の協力のもと安川が行った。
5. 本書の原稿執筆は、1～3章、第4章第1節、第5章は伊部が第4章第2節は重金が行った。
6. 本調査の記録及び出土遺物は摂津市教育委員会において保管している。

凡 例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系平面直角座標VI（測量成果 2011）に基づいており、方位は平面直角座標系に基づく座標北を北として表記し、本文中では単位の「m」を省略した。標高は、海拔高（東京湾平均海面高度）を使用した。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準拠した。
3. 第2図は国土地理院の治水地形分類図を、第3図は国土地理院発行（1/25,000 地形図）を調整して用いた。
4. 遺構平面図や個別の遺構図は、各図にスケールを掲載し、縮尺は平面図は1/100、個別遺構図は1/20を基本とするが、遺構の規模や紙面に合わせて適時変更した。
5. 遺物実測図は、各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を1/4とした。実測図の断面は、須恵器・陶磁器・鉄製品は黒塗りとした。遺物番号は、実測図・写真図版共に同一番号である。
6. 文書に収録した図・資料等の引用・参考文献は、各節又は各章の文末に明記した。
7. 遺構番号は1区から落ち込み、ピット、溝、土坑の遺構別の連番ではなく、工区ごとに1面から3面まで順番に附番した。よって1～3工区を俯瞰して見ても遺構別の番号は通番しない結果となった。

目 次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過 1

　　第1節 調査に至る経緯 1

　　第2節 調査の経過 1

第2章 地理的環境と歴史的環境 4

　　第1節 調査地の位置と地理的環境 4

　　第2節 歴史的環境 4

　　第3節 既往の調査 8

第3章 基本層序と遺構面 10

　　第1節 基本層序と各層の概要 10

第4章 調査成果 14

　　第1節 検出された遺構 14

　　第2節 出土した遺物 24

第5章 まとめ 40

写真図版

報告書抄録

図 目 次

第1図 摂津市の位置	2	第19図 出土遺物実測図6 1:4	34
第2図 周辺の治水地形分類図 1:50000	3	第20図 出土遺物実測図7 84~88 1:4 89・90 1:2 91 1:1	… 35
第3図 周辺の遺跡 1:2500	7	第21図 第1遺構面 カクラン坑7・ピット8・土坑9 1:20 1:40	… 41
第4図 調査区位置図 1:10000	9	第22図 第2遺構面 落ち込み1 1:40	… 42
第5図 調査区北壁土層断面図 水平1:100 垂直1:50	11	第23図 第2遺構面 ピット2・溝10 1:20 1:60	… 43
第6図 調査区区割図 1:250	12	第24図 第3遺構面 落ち込み3・ピット4 1:20 1:40	… 44
第7図 遺構配置図 1:200	13	第25図 第3遺構面 溝5 1:20	… 45
第8図 第1遺構面 調査区平面図(1) 1:100	15	第26図 第3遺構面 溝6・11・12・13 1:20	… 46
第9図 第1遺構面 調査区平面図(2) 1:100	16	第27図 第3遺構面 溝14・15・16・17 1:20	… 47
第10図 第2遺構面 調査区平面図(1) 1:100	19	第28図 第3遺構面 溝18・19・20・土坑21 1:20	… 48
第11図 第2遺構面 調査区平面図(2) 1:100	20	第29図 第3遺構面 溝22・23 1:20	… 49
第12図 第3遺構面 調査区平面図(1) 1:100	21	第30図 第3遺構面 溝24・25 1:20	… 50
第13図 第3遺構面 調査区平面図(2) 1:100	22	第31図 第3遺構面 溝26 1:20	… 51
第14図 出土遺物実測図1 1:4	25	第32図 第3遺構面 溝27・28・29 1:20	… 52
第15図 出土遺物実測図2 1:4	27	第33図 第3遺構面 溝30・31・32 1:20	… 53
第16図 出土遺物実測図3 1:4	29	第34図 第3遺構面 溝33・34・ピット35・溝36 1:20	… 54
第17図 出土遺物実測図4 1:4	30	第35図 第3遺構面 溝37・38・39・40 1:20	… 55
第18図 出土遺物実測図5 1:4	32	第36図 瓦・サヌカイト出土地点 1:250	… 56

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧	6	第3表 遺物一覧表	… 37 ~ 39
第2表 遺構一覧表	23		

写 真 図 版 目 次

本文図版 写真1 調査の状況	
図版1 1. 1区北壁土層断面 (南から)	
2. 2区西半北壁土層断面 (南から)	
図版2 1. 2区東半北壁土層断面 (南西から)	
2. 2区東半北壁土層断面 (南東から)	
図版3 1. 1区落ち込み1土層堆積状況 (東から)	
2. 2区第1遺構面ピット8断面 (南から)	
図版4 1. 2区第1遺構面土坑9断面 (南から)	
2. 1区溝5断面 (北から)	
図版5 1. 1区溝6断面 (北から)	
2. 1区第2遺構面遺構群 (南から)	
図版6 1. 2区第1遺構面全景 (東から)	
2. 2区第2遺構面溝10断面 (南から)	
図版7 1. 2区溝10全景 (北から)	
2. 2区第2遺構面全景 (東から)	

図版8 1. 1区遺物出土状況 (南から)	
2. 2区第3遺構面サヌカイト片検出状況 (南から)	
図版9 1. 1区第3遺構面全景 (東から)	
2. 2区第3遺構面全景 (東から)	
図版10 1. 2区第3遺構面遺構群 (西から)	
2. 3区攪乱土除去後 (西から)	
図版11 1. 3区第3遺構面全景 (西から)	
2. 3区第3遺構面全景 (南から)	
図版12 出土遺物1	
図版13 出土遺物2	
図版14 出土遺物3	
図版15 出土遺物4	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本調査は、千里丘駅西地区再開発事業に伴う発掘調査です。

摂津市北部に位置するJR千里丘駅西地区は、JR京都線で新大阪駅から約10分、大阪駅から約14分、府道大阪高槻京都線及び府道正雀停車場線に囲まれた交通の要衝ですが、地区内には狭隘道路に囲まれた木造住宅の建ち並びや、駐車場利用等、良好な土地利用が図られておらず、また駅前における交通混雑が生じています。

これらの課題解消に向け、平成31年3月に策定した「再開発基本方針」では当該地区について、駅前広場整備を含む再開発事業による交通結節機能の強化、計画的な土地の高度利用による災害に強い良好な住環境形成、都市機能の充実による駅前にふさわしい集約的な拠点形成を図ることなどを整備方針としており、その方針に沿った市施行の再開発計画（案）の検討を進め、令和2年2月25日に、市街地再開発事業及び関連する都市計画について決定いたしました。その後、令和3年6月30日に大阪府知事の認可を受け、事業計画を決定しました。

このように再開発事業が進む中、千里丘遺跡の範囲内で土木工事等が行われる事となりました。関係課である都市計画課と生涯学習課内で協議を行い、文化財保護法第94条の通知の及び発掘調査会社の選定・入札が行われました。千里丘遺跡は平成17年度から平成21年度の間、都市計画道路千里丘三島線道路改良工事に伴い発掘調査が大阪府教育委員会により実施されました。その中で当該地の南に隣接する平成17年度の調査で小さいものを含めると200点を超えるサヌカイト石器剝片が出土しました。大阪府教育委員会の報告では、千里丘遺跡のサヌカイト石器集積は保管のための集積遺構であったと推定しています。

当該地と平成17年度の調査地とは一番近いところで10m程しかはなれていません。このような立地状況や解体工事がまだ終わっていない状況で試掘調査を実施せずに本発掘調査を実施する事となりました。

第2節 調査の経過

発掘調査は、解体工事の進捗状況から西から第1区、第2区、第3区と分けて実施した。（第6図）

発掘調査工程

7月18日

調査開始。調査区の明示。

7月19日～7月21日

1区機械掘削。2区部分に鉄板を敷き廃土を事務所前へ。GL-80～85cm（3層上面）まで。

7月24日

1区調査区北壁で側溝掘削。おおむねGL-1.8mまで。

7月25日

第3層上面で精査。遺構の有無を確認。1区第1遺構面人力掘削及び精査。全景写真撮影。

7月26日～7月28日

1区 第7層上面まで掘削。遺構の有無を確認。

8月1日

1区 第7層上面精査終了後、第二遺構面として全景写真撮影。第7層土（第2遺構面ベース土）を掘削。サブトレーンチ掘削。

8月2日

1区 第7層土（第2遺構面ベース土）を掘削。遺構面精査中、縄文時代の所産と思われる石鏃1点が出土。

8月3日

1区 第3遺構面（地山面）検出遺構の掘削。検出遺構の土層断面写真撮影、断面図作成。ピット4北隣の瓦片出土状況写真撮影、同3Dモデル作成。遺構完掘後、写真精査・全景写真撮影。

8月4日

地山たち割を行う。地山面から-1.0mまで掘削。無遺物・無遺構の確認。断面写真撮影。

8月18日・8月21日・8月22日

2区 機械掘削。盛土（第1層）、旧耕土層（第2層）を除去し第3層上面まで行う。

8月23日

2区 仮囲い工事。調査区内残置ガス管の締め切りを確認し、専門業者により管切断を行う。

8月24日～8月30日

2区 機械掘削。引き続き盛土（第1層）、旧耕土層（第2層）を除去し、第3層相当層の上面まで行う。攪乱掘削。

8月31日

2区 機械掘削。引き続き盛土（第1層）、旧耕土層

(第2層)を除去し、第3層相当層の上面まで行う。第1遺構面の精査、遺構検出、遺構掘削。

9月1日

2区 第3層相当層の上面を第1遺構面として精査。遺構検出作業。遺構半裁、同土層断面写真撮影。遺構掘削。第1遺構面の全景写真撮影。調査区北壁の側溝掘削。

9月4日～9月11日

2区 第2遺構面検出の人力掘削(グリッド堀)第3層を掘削。第4層相当土上面まで。

9月12日～9月14日

2区 西半部 第4層相当土の掘削。

9月15日

2区 西半部 第2遺構面上面精査。調査区側溝の切り直し。東半部 第3・4層相当土の掘削。

9月19日

2区 西半部 調査区北壁土層断面写真撮影。土層断面分層とオルソ画像作成。東半部 第3・4層相当土の掘削。

9月20日

2区 東半部 第3・4層相当土の掘削。調査区北壁土層断面の分層とオルソ画像作成。2区第2遺構面精査、落ち込み、溝10検出。

9月21日

2区 東半部 第3・4層相当土の掘削後、精査と遺構検出。溝10の掘削。同セクション断面写真撮影と断面図作成。調査区南壁で側溝掘削。

9月22日

2区 東半部 西半部 排水工。精査の後、全景写真撮影。

9月25日～9月26日

2区 落ち込みの埋土掘削し、第3遺構面(地山)検出の人力掘削、溝、ピット検出、遺構掘削。

9月27日・9月28日

2区 東半部 第2遺構面ベース土の掘削。西半部第3遺構面(地山上面)遺構検出。同検出遺構の半裁。同土層断面写真撮影と断面図作成。サヌカイト剥片1点を検出。

9月29日

2区 第3遺構面(地山上面)遺構土層断面写真撮影と断面図作成。全景写真撮影。地山たち割り。都市計画課職員、生涯学習課職員を対象とした現地説明。

10月3日～10月6日

3区 調査区明示の後、機械掘削。

10月10日

3区 掘削終了後の状況を、写真として記録(第1遺構面相当面)。全景写真撮影とレベリング。下層の状況確認のため東西地中梁部分でサブトレを掘削。

10月11日

3区 サブトレーナを入れて整地層下層を確認、攪乱及び第3面の残存を確認。

10月12日・10月13日

3区 攪乱土層を除去し、第3・4層相当土と地中梁等の攪乱溝・坑の範囲の把握。

10月16日

3区 攪乱土層を除去後の状態で精査。調査区全景写真撮影(攪乱土層除去後全景)。

10月17日～10月19日

3区 第4層相当層の掘削。除却ビルの基礎にもなる攪乱坑の掘削。

10月23日・10月24日

3区 第3遺構面精査と遺構検出。調査区壁面精査。土層断面写真撮影。検出遺構の平面データ取り込みと半裁。土層断面写真撮影。同土層断面データ取り込み。

10月25日

3区 第3遺構面 全景写真撮影。地山たち割り調査。都市計画課職員、生涯学習課職員を対象とした現地説明。

10月26日～10月30日

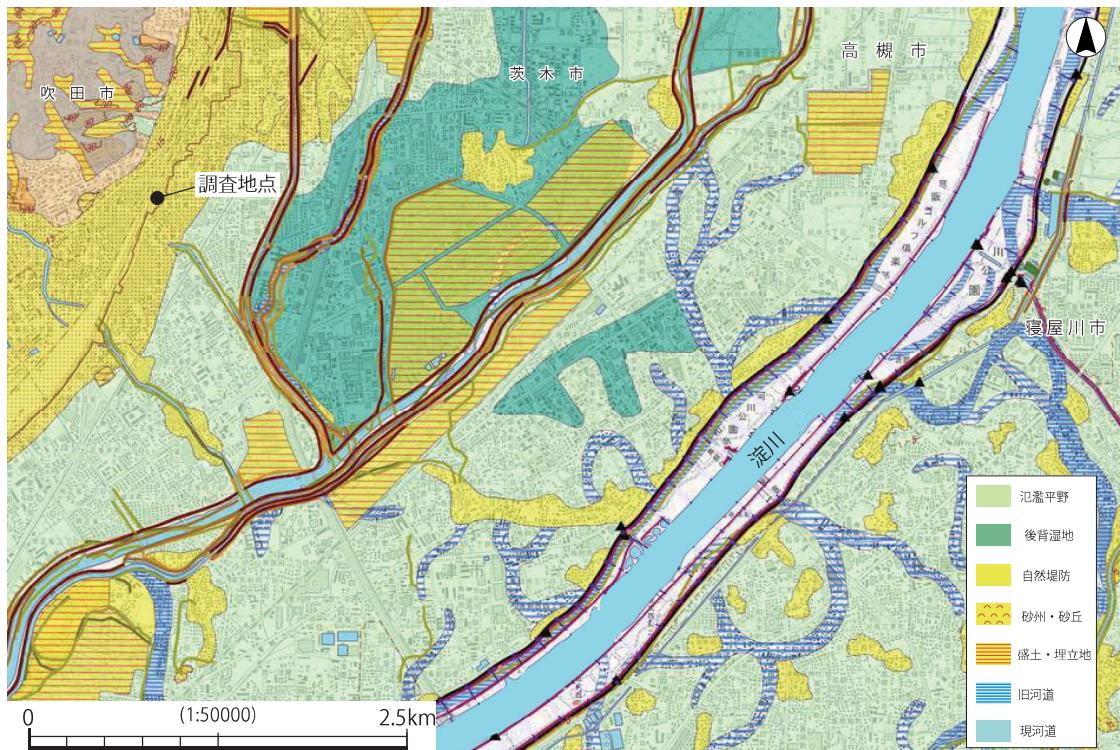
3区 埋め戻し。



第1図 摂津市の位置



写真 1 調査の状況



第2図 周辺の治水地形分類図 1:50000

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 調査地の位置と地理的環境

大阪平野の北部に位置する摂津市は、淀川の豊かな自然に育まれ、古くから農耕が盛んで、大阪と京都を結ぶ水陸交通の要衝としても重要な役割を担ってきました。

市域は東西6キロメートル、南北5キロメートル、面積は14.87平方キロメートルで、西は大阪市や吹田市、北は茨木市、東は高槻市、南は淀川をはさんで守口市や寝屋川市と接しています。

市内からは、北西にかけて六甲山や北摂の山々を、東から南には生駒や金剛の山並みを望むことができます。

大阪の都市部から約12キロメートルという距離にあり、大阪市やその衛星都市と幹線道路や鉄道で結ばれている本市は、大阪都市圏の核になる都市として発展を続けています。(市のホームページより)

今回調査を行った千里丘遺跡は、千里丘陵縁辺に位置します。

以下、「新修摂津市史第1巻第3章第4節 丘陵及び台地の地質」より抜粋

戦後、天然ガス開発を目的に大阪周辺の丘陵での地質調査が始まり、大阪平野や京都盆地、奈良盆地の丘陵を構成する鮮新—更新統は、海成粘土層や火山灰層を鍵層として対比され、千里丘陵を模式地として大阪層群と呼ばれるようになった。大阪層群は河成及び湖沼成の砂礫・粘土層からなるが、上半部はこれら陸成層と海成粘土層が互層している。大阪層群の海成粘土層は千里丘陵の海成粘土層基準として、下位よりMa1、Ma2、…Ma8(Maは海成粘土の略)と名付けられた。

最初に大阪層群の層序がたてられたのが千里丘陵でした。はじめて同層群で海成粘土と淡水粘土とが識別されました。またはじめてアズキ、ピンク火山灰層などの多数の火山灰層がこれら粘土層に挟まれて確認されました。現在千里丘陵は大阪層群の模式地に設定されていますが、宅地化がすすみほとんどその露出を見ることはできません。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

摂津市域が沖積平野という事もあり、旧石器時代の遺跡は現段階ではありません。しかし『新修摂津市史第1巻』によると、明和池遺跡・吹田操車場遺跡で二上山産サヌカイトを石材として瀬戸内技法によってつくられた後期旧石器時代の石器が出土しています。郡家今城遺跡のようなキャンプサイトであったかどうかはわかりませんが、遊動した旧石器時代人の足跡が確実に地面に残されていたと記されています。

縄文時代

鳥飼西地区淀川河床から若干の縄文土器片が発見されています。昭和49年(1974)10月以降、淀川浚渫工事に関連する採集資料です。その時採集された縄文土器は4点です。

縄文時代後期(1点)と晩期(3点)に比定される遺物です。縄文晩期の土器はいずれも小片で、深鉢形土器の胴部、浅鉢形土器の胴部・口縁部です。色調は黒褐色で器面は研磨されていますが、胴部に条痕を残すものが見られます。滋賀里I・II式に比定されます。いずれもローリングをあまり受けておらず上流の高槻市柱本遺跡との関係が留意されます。柱本遺跡は高槻市柱本の淀川河床に所在します。この遺跡も昭和46年の浚渫工事の際に発見されました。前期から晩期にかけての深鉢を中心とした良好な資料が採集されています。近接する位置に柱本南遺跡があり、その一部が摂津市域の鳥飼上に含まれています。

縄文時代から近世にわたる複合遺跡である千里丘遺跡の縄文時代の地層から、碎片を除く170点を越えるサヌカイト剥片の集積が検出されました。近くからは縄文土器片も出土しました。剥片は16点が上層で検出されていましたが、この16点を取り上げてみるとレンズ状に集積していることが分りました。堆積の中心部の厚さは約9.3cmとなります。接合可能なものが数点ありましたが、石器として完成したものはありませんでした。

平成22年から平成24年に実施された明和池遺跡の発掘調査では、弥生時代から古代に属する流路や溝が検出され、包含層からは深鉢の口縁部及び体部の縄文土器片が出土しました。特徴的な文様と磨消縄文が外面に見られ、縄文時代後期初頭に位置づけられる「中津式」の土器です。大阪府の報告書では、流路から出土したものについては表面があまり摩滅しておらず、付近で投棄さ

れた状況を呈している蓋然性が高いことから、当該期の集落が近隣に存在する可能性があると記されています。

弥生時代

新在家1丁目の光蓮寺に弥生土器の壺が保存されています。昭和12年(1937)に鳥飼西700番地の水田をブルツウィスラー絹糸株式会社工事で掘削した際、地下3~10mの地点から出土したと伝えられるものです。壺は高さ26cm、最大胴幅27cm、土器表面は茶褐色、内面は灰褐色を呈し、底部は径8cmの平底です。土器の全面に朱を塗布した痕跡があり、胴部中位部に小穿孔をもち、口縁部は一部を欠いています。畿内弥生土器第1様式の時期が想定されます。この土器は単なる貯蔵用ではなく、祭祀用・供獻用・乳幼児壺棺などの用途の可能性があります。また土器にはローリング痕が少なく鳥飼西地区には弥生時代前期の集落跡が遺存している可能性も残ります。

その他、前述の鳥飼西地区淀川河床からも弥生土器片が採集されています。弥生時代前期の壺頸胴部や中期の壺胴部等です。昭和62年大阪府教育委員会による明和池遺跡の発掘調査では、弥生時代中期の土器、弥生時代末期の自然河川や土器が見つかっています。

平成22年から平成24年に実施された明和池遺跡の発掘調査では、弥生時代後期に現山田川周辺に集落が営まれていた事がわかりました。堅穴建物15、掘立柱建物8のほか、土坑、溝、流路等が検出されました。出土した弥生土器には瀬戸内地方や近江地方などの交流を物語るようなものも含まれ、現山田川の前進となる河川を通じて他地域と交流を行っていた様子が窺えると大阪府の調査報告書で報告されています。

また平成27年から平成28年に実施された明和池遺跡の発掘調査では、流路の両岸に展開する弥生時代後期後半から終末にかけての集落が見つかりました。検出された主な遺構は堅穴建物11、掘立柱建物2のほか、井戸、土坑、ピット、溝です。この調査では、青銅器鋳造に関する遺物が出土しました。遺物としては、銅鐸飾耳片、銅塊、曲管形轍羽口、土製鋳型外枠、高環型土製品、真土などです。これらの遺物から、明和池遺跡は弥生時代に銅製品を生産していた集落であるという可能性がでてきました。

古墳時代

蜂前寺跡をはじめ、東正雀遺跡などで古墳時代の遺構、遺物が検出されています。本市では前時代と比べ古墳時代になりますと遺構、遺物が質、量とも増加する傾向にあります。吹田市岸部地区に近接する味舌地区を中心として、須恵器が採集されています。昭和8年、旧味舌村大字庄屋(現在の庄屋1丁目)の共有用水池であった「明和池」の底土を1.3m掘り下げ、この土で隣接する牛屋池を埋め立てる工事中に雑多な土器とともに須恵器が採集されました。発掘調査によるものでなく詳しくは分りませんが、南北に走る約1mの幅をもった帯状の砂層から発見されたようです。完形品としては横瓶(よこへい)、丸底壺、坏(つき)身・蓋が出土し、現在でも味舌天満宮に保管されています。これらの採集土器で明和池遺跡は周知されるようになりました。

平成22年から平成24年の明和池遺跡の発掘調査で古墳時代後期から飛鳥時代の遺物を大量に包含する流路が発見されました。出土した遺物の9割強が須恵器でした。その中には焼成不良品や焼け歪み、溶着品などが含まれており、千里丘陵に近いという地理的条件を考慮すれば、千里古窯址群の須恵器窯で焼成された須恵器が何らかの理由でここまで運ばれ廃棄された可能性があります。古墳時代は須恵器の良品・不良品を選別していた集落であった可能性があります。

奈良・平安時代

それまで三嶋郡と呼ばれてきた北摂地域は、律令制度が施行された頃より、嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の三郡に分割されました。市域は嶋下郡に属していました。この時代から市域は歴史に名を残していきます。延暦4年(785)には続日本紀に見られる三国川(神崎川)に通じる分流工事、鳥飼付近の河川氾濫原や、中州では鳥飼牧の設置、「大和物語」に見られる宇多天皇の離宮鳥飼院への行幸などが文献資料等に散見されます。しかし現段階ではこれら歴史的事象について充分な発掘調査による検証が行われているわけではありません。今後の調査に期待がもたれます。

平成22年から平成24年の明和池遺跡の発掘調査で、奈良・平安時代の集落が発見されました。流路の埋土から墨書き土器、墨書き人面土器、ミニチュア竈、土馬が出土しました。なかでも底部に「王」と墨書きされた土器がまとまって出土しました。出土遺物の中には、律令祭祀に用いられる墨書き人面土器や土馬等が含まれることから、流路において何らかの祭祀行為が行われていた可能性があります。

中近世

この時代は、市域の中央を東西に流れる安威川より北の地域で、遺構・遺物の検出が見られます。平成 12 年の蜂前寺跡発掘調査では、14 世紀から 15 世紀にかけての瓦を含む東西の溝が検出されています。また昭和 62 年明和池遺跡の調査で、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物跡、戦国時代の大溝、各時代の土器、陶磁器が検出されています。

千里丘東遺跡からは 15 世紀前半頃の土師皿 7 枚を使用しての地鎮が想定される遺構や土坑 13、落ち込みなどが検出されました。須恵器、土師器、瓦器などの遺物も検出されました。発掘調査による所見以外にも、戦国時代になりますと、本市域にも織田信長ら武将の陣が張られたとの記述が残っています。

千里丘にある勝久寺は石山合戦の舞台となり、近くの境川には「流れの馬場」と呼ばれる戦場の跡もあります。江戸時代には、畿内、西国を支配するための拠点である大坂城の周縁という政治的、経済的にも重要な位置でした。

参考文献

摂津市 2022 『新修摂津市史第 1 卷』

大阪府教育委員会 2007 『千里丘遺跡』 都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に伴う調査

大阪府文化財センター 2014 『吹田操車場遺跡 10・明和池遺跡 3』

大阪府文化財センター 2017 『明和池遺跡 5』

第 1 表 周辺の遺跡一覧

番号	遺 跡 名	時 代	種 別
1	千里丘遺跡	平安・中世	集落跡
2	似禪寺山遺跡	古墳・奈良・近世他	古墳・その他
3	三島街道（亀岡街道）	近世	その他
4	千里丘 1 丁目所在遺跡	中世	生産遺跡
5	三宅城跡	中世	城館跡
6	常楽寺跡	奈良	社寺跡
7	千里丘東 1 丁目遺跡	古墳	散布地
8	千里丘東 2 丁目遺跡	奈良・平安	生産遺跡
9	千里丘東 3 丁目遺跡	中世	散布地
10	千里丘 2 丁目所在遺跡	弥生・中世	散布地
11	千里丘 3 丁目所在遺跡	古墳～中世	集落跡
12	千里丘 6 丁目所在遺跡	古墳～中世	集落跡
13	蜂前寺跡	古墳～近世	社寺跡・集落跡
14	千里丘東 4 丁目遺跡	中世	集落跡
15	千里丘 7 丁目所在遺跡	古墳～中世	集落跡
16	明和池遺跡	古墳～近世	集落跡
17	千里丘東 4 丁目所在遺跡	その他（不明）	散布地
18	庄屋 1 丁目所在遺跡	その他（不明）	散布地
19	庄屋 2 丁目所在遺跡	その他（不明）	散布地
20	東正雀所在遺跡	古墳～近世	集落跡
21	東正雀遺跡	中世	集落跡
22	正雀 1 丁目遺跡	平安	集落跡
23	東正雀所在遺跡第 2 地点	その他（不明）	集落跡
24	岸部東遺跡	中世	集落跡
25	須恵器出土地	古墳	散布地
26	吹田操車場遺跡	旧石器～近世	集落跡
27	吹田操車場遺跡 C 地点	中世	集落跡・その他
28	中ノ坪遺跡	古墳～中世	集落跡



第3図 周辺の遺跡 1:2500

第3節 既往の調査

千里丘遺跡は、平成17年度から平成21年度にかけて都市計画道路千里丘三島線道路改良事業に先立ち大阪府教育委員会（以下「大阪府」と表記）により発掘調査が実施されました。平成17年7月21日・22日の2日間にわたり計6か所トレンチ調査が実施され、この調査で中世のものと見られる遺構・遺物が検出されました。遺構としては、直径約25cmの土坑もしくはピットと見られる円形の遺構が2基検出されました。この土坑を検出した青灰色粘土層下部のさらに下に遺物包含層が検出され、土師器と瓦器の小片が数点出土しました。

このトレンチ調査の成果から、道路工事予定地の中で約200m²（8m×25m）の調査区が設定され、平成17年9月26日～10月22日にわたって発掘調査が実施されました。

平成17年度の調査

この調査では、近世、鎌倉時代前後の中世期、奈良・平安の古代期から縄文期における耕作・建物の遺構が検出されました。また各時代を特徴づける陶磁器、瓦器、黒色土器、土師器、須恵器、瓦、石器等の遺物が出土しました。

調査では3面の遺構面が検出されました。

第1遺構面では、溜池、流路を中心として、近世以降の土坑、溝などの耕作の痕跡とピットが検出されました。

第2遺構面では、第1遺構面から続く溜池、流路、溝、ほぼ東西方向に並ぶ鋤溝群等の耕作の痕跡が検出されました。8棟まで確認された掘立柱建物群のピット、土坑も検出されました。

遺構とその周辺から土師器片、瓦器片が出土し、遺構はおもに鎌倉時代前後の中世期のものだと報告されています。

第3遺構面では、古代から縄文時代の遺構、遺物が見つかりました。また奈良～平安時代の流路、溝、鋤溝、足跡などの耕作の痕跡と掘立柱建物の痕跡と思われるピットが検出されました。遺構の周辺からは、土師器、須恵器、黒色土器（内黒）の破片が出土しました。

また縄文時代の地層から石器集積と縄文土器が出土しました。破片を除く170点を超えるサヌカイトの剥片がぴったりと重なり密着した状態で検出されました。

調査地は旧地形における谷部分の北側に位置したことから、長期にわたる人々の生活の痕跡が運良く削平をのがれて残り、縄文～近世にわたる複合遺跡であることが

確認されたと大阪府により報告されています。

平成18年度の調査

この調査では、近世、中世、古代それぞれの遺構面から鋤溝、溝などの耕作の痕跡と集落跡である柱穴の痕跡が検出されました。大阪府の報告では、遺物は極端に少ないが、それでも時期の推定が可能である瓦器の小片について、口縁端部の調整と暗文及び高台の退化具合から、中世の遺構面は12世紀後半頃の遺構面であると記されています。また古代の遺構面は、隅が丸まった方形の柱穴や黒色土器片の出土より、9世紀頃の遺構面であろうと報告されています。平成18年度の調査は平成17年度に調査が行われた千里丘1丁目遺跡第2地点の西側に隣接します。この段階で平成17年度、平成18年度の調査成果を踏まえて、千里丘1丁目遺跡第2地点、第3地点、及び千里丘2丁目遺跡第2地点を併せて千里丘遺跡として整理されました。

平成19・20年度の調査

平成19年11月に平成18年度調査区から狭い生活道路を挟んでさらに西側の2か所、合計150m²について調査が行われました。平成20年度は、用地買収が府道大阪高槻京都線との交差点まですべて終了しました。用地の西端は、当時、平成19年度に設定した周知の遺跡外でしたが、遺跡が継続して拡がる可能性があったため、平成20年6月に2か所のトレンチを設定して試掘・確認調査が大阪府により行われました。この調査の結果、西端近くまで遺構・遺物の残存が確認されました。この結果、千里丘遺跡の範囲を交差点まで含むように改めて遺跡が拡大されました。当時の工事対象域はすべて本発掘調査を行われる運びとなりました。

平成19年度の調査では、平成20年度のすぐ東に位置し、本体工事の進捗状況と通行路確保の都合で4つの調査区に分けて調査が行われました。第3遺構面に対応する上層の遺構面からは、遺構の密度は希薄でしたが、鋤溝の痕跡や小土坑があったと報告されています。この遺構面を構成する堆積は削平を受けていましたが、その他の調査区において近世に相当する遺構面と対応する層位であると報告されています。

第5遺構面に対応する遺構面からは細溝群を中心とする耕作の痕跡が主な遺構で、それらに加えてピット、小土坑がわずかに検出されました。鋤溝以外の遺構の性格は、遺物もほぼ出土せず、情報量に乏しいためわからないと報告されています。

平成 20 年度の調査では、第 5 遺構面まで確認されました。

第 1 遺構面は、現代耕土上面の耕作及び建物の痕跡のみ確認されました。

第 2 遺構面では、細溝群、落ち込み、溝、土坑、ピットなどが検出されました。細溝群は、幅 20 ~ 40cm 程度のものが東西からやや南にふれる方向で、何条も平行して走ります。耕作にともなう鋤溝の痕跡であると想定できると報告されています。また北東・南西方向に落ち込みの肩が検出されました。落ち込みの西側では、ほぼ正方向に走るやや不整形で幅広い溝、足跡のような土坑、性格不明な土坑が検出されました。落ち込みの東側では、鋤溝群とともに柱穴の想定できるピットが検出されました。

第 2 遺構面からは、肥前系の染付陶器片、湊焼の土師質土器の破片、備前系のすり鉢片等、陶磁器を中心とする遺物が出土しました。出土遺物の状況から第 2 遺構面は概ね 18 ~ 19 世紀頃の近世に相当すると報告されています。

第 3 遺構面からは、鋤溝、溝、ピットが検出されました。鋤溝群は、第 2 遺構面の傾向を踏襲し、東西方向からわずかに南にふれるものの、ほぼ正方位であると報告されています。この時の調査では、ピットや土坑が検出されました。並んで建物となるような痕跡は確認でき

なかったと報告されています。

第 3 遺構面からは、主に土師器、瓦器、陶磁器類が遺物として出土しました。時期の特定が可能なものでは、白磁碗の口縁部片や備前系のすり鉢のような破片が出土しました。これらの遺物より第 3 遺構面は、中世の後期、概ね 17 世紀頃までに形成された遺構だと報告されています。

第 5 遺構面は、I 区で上層と同様に鋤溝群が密集して検出されました。幅 20 ~ 30cm 程度の溝が何条も走る状況でした。II 区ではやや規模の大きい幅 50 ~ 70cm 程度の溝 2 条が検出されました。溝の主軸も上層と同様に、東西方向からわずかに南にふれているものの、ふれはばは上層遺構よりも大きく、正東西方向に近いと言えないと報告されています。

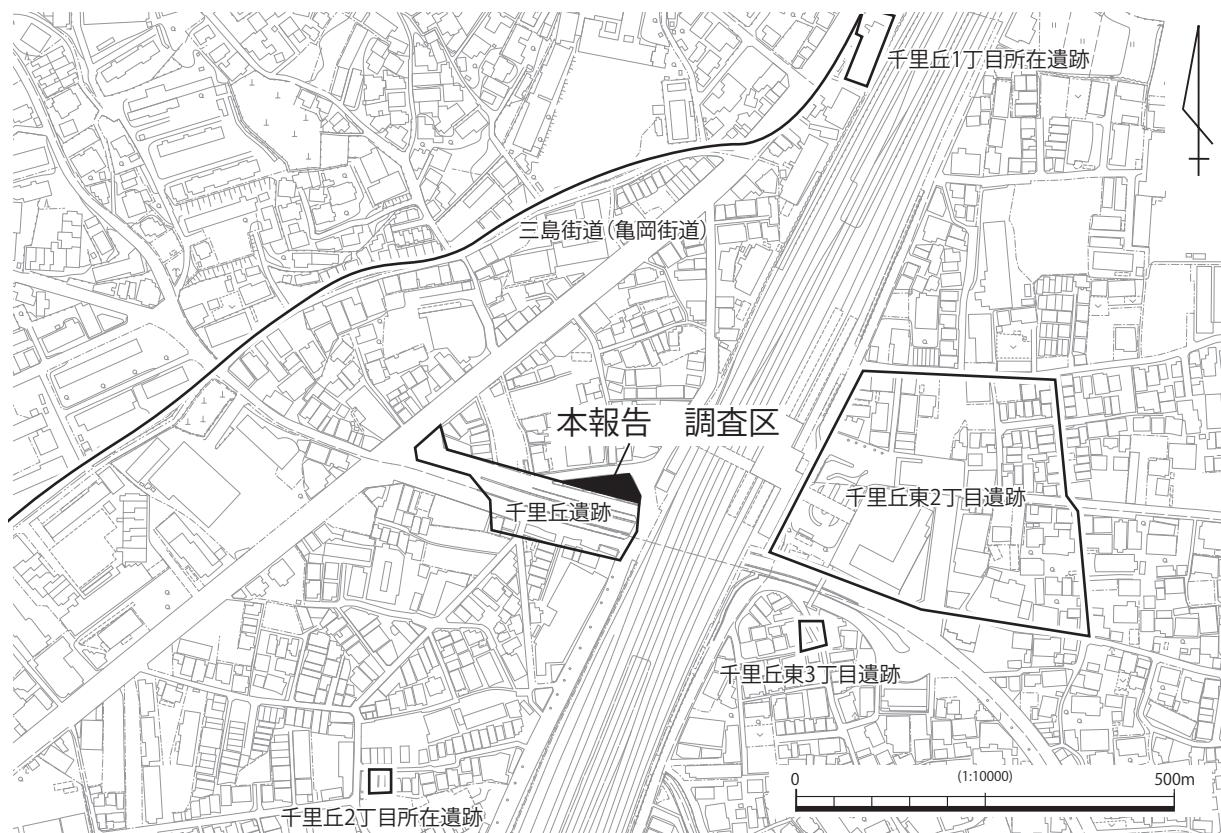
第 5 遺構面から検出された遺物は極めて少なく、図化できたのは陶磁器の口縁部破片 1 点であったと報告されています。

参考文献

大阪府教育委員会 2006 『千里丘遺跡群発掘調査概要』

大阪府教育委員会 2007 『千里丘遺跡』

大阪府教育委員会 2009 『千里丘遺跡 II』



第 4 図 調査区位置図 1 : 10000

第3章 基本層序と遺構面

第1節 基本層序と各層の概要

今回の調査地では、現代盛土層（第1層）以下、G L -1.6 m～1.9 mの間で第1層から第14層まで細別した。第1層はJR千里丘開設に伴う宅地開発にともなう整地層であった。1区、2区においては、部分的に1.5 mまで達する部分があるが、おおむね60～80cm程度である。第1層は3区では、1、2区とは様相が異なり、全面的に1.5m程の厚さがあった。

第2層はJR千里丘ができる直前までの近代の耕作土が想定される。

第3層は、褐灰色（10 YR 5/1）砂質土で第1遺構面ベース土である。水平堆積ではあるが東へ14.5mぐらいで第4層の埋土のような形で消失する。

第4層は、マンガン班を含むオリーブ灰色（2.5 G Y 5/1）砂粒砂粘質土で第3層が消失する14.5m以降は第1遺構面のベース土となる。

第5層は、一部黄褐色シルトブロックを含む褐灰色（10 YR 5/1）粘質シルト。第5層は、調査区北壁断面の状況から調査区全てで水平に堆積していた可能性がある。

第1遺構面は第3層～第5層で構成されており、遺構の精査は第3層、第4層上面で行った。人力掘削は土色が似ているので完全ではないが、上段、下段と2つに分けて掘削した。結果、上下段とも遺物の包含が希薄で時期差を見出すことは難しかった。第3層、第4層、第5層が別時期の開発なのかは判然としない結果となった。

第1遺構面から検出された遺構はピット、土坑であるが、建物跡が想定される検出状況ではなかった。

また第1遺構面精査時に検出された遺構からは、土師器皿口縁部、香炉と思われる施釉陶器、色絵磁器等の遺物が出土した。

遺物の検出状況から時代を特定することが非常に困難な状況であるが、概ね江戸時代以降に形成された堆積だと考えられる。

第2遺構面は、第7層及び地山である第9層、第10層、第11層、第12層、第13層、第14層で構成されている。第7層は、マンガン班を含む黄灰色（2.5 Y 6/1）粘質シルトで一部黄褐色シルトブロックを含む。

第9層は、明黄褐色（10 YR 6/2）粘土で極めて精緻な粘土で千里丘陵の地山と判断した。

第10層は、明黄褐色（10 YR 6/2）粘質土で第9層と同色であり、小礫を含み精緻ではないが、この堆積も千

里丘陵の地山と判断した。

第11層は、明黄褐色（10 YR 6/2）粘質土で第9層と同色であり、第10層より更に多くの小礫を含むが、第10層と同様に千里丘陵の地山と判断した。

第12層は、明黄褐色（10 YR 6/2）粘土で、きわめて粘質が強く、千里丘陵の地山と判断した。

第13層は、緑灰色（10 G Y 6/1）粘土で小礫を含まず極めて精緻な粘土である。第12層と同様に地山と判断した。

第14層は、赤褐色（2.5 Y R 4/6）砂質シルトで、赤味が極めて強く、小礫を含まず極めて精緻な粘土である。この堆積も地山と判断した。

第6層は、第2遺構面から検出された溝10の埋土（灰色粘質土）である。

第2遺構面から検出された遺構は、溝、落ち込み、ピットである。

第2遺構面精査時に検出された遺構からは、和泉型Ⅲ期以降の瓦器碗、中世後期の貿易陶磁器の青磁碗等の遺物が出土している。

第1遺構面と同様に建物跡はなく江戸時代の耕作土の堆積だと考えられる。

第2遺構面で検出された落ち込みの埋土を掘削し、全面に地山を検出した状態で精査し、溝、土坑、ピットが検出された面を第3遺構面とした。よって第3遺構面のベース土は全て地山である。

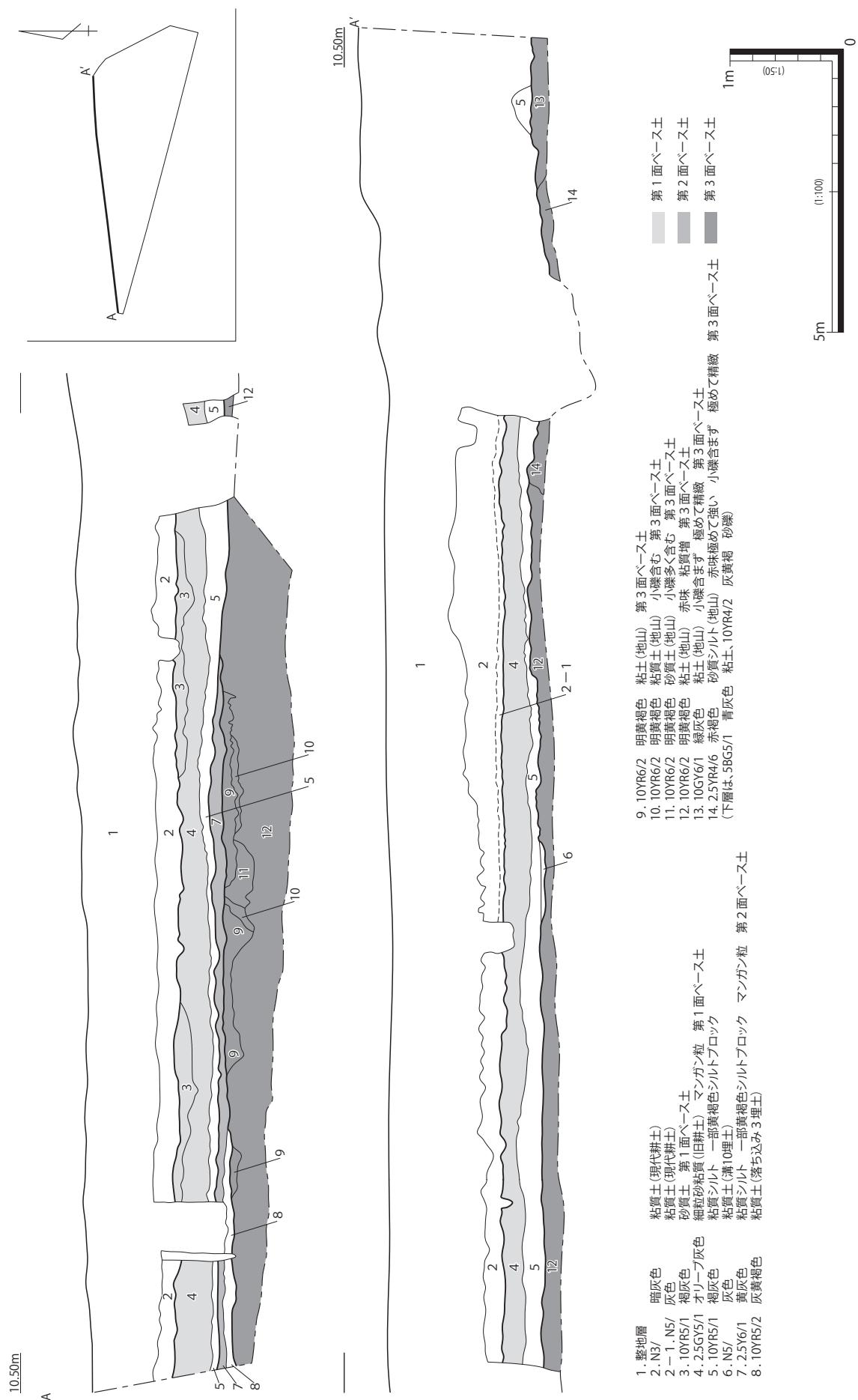
地山には第3遺構面にくいこむ形で落ち込み3が検出された。落ち込み3は北壁の断面から確認できた。埋土は第8層で、灰黄褐色（10 YR 5/2）粘質土である。

第3遺構面からは、溝31、落ち込み1、土坑1、ピット2と比較的多くの遺構が検出された。遺構の性格は、建物跡ではなく、耕作に伴う里道の溝か鋤溝が想定される。

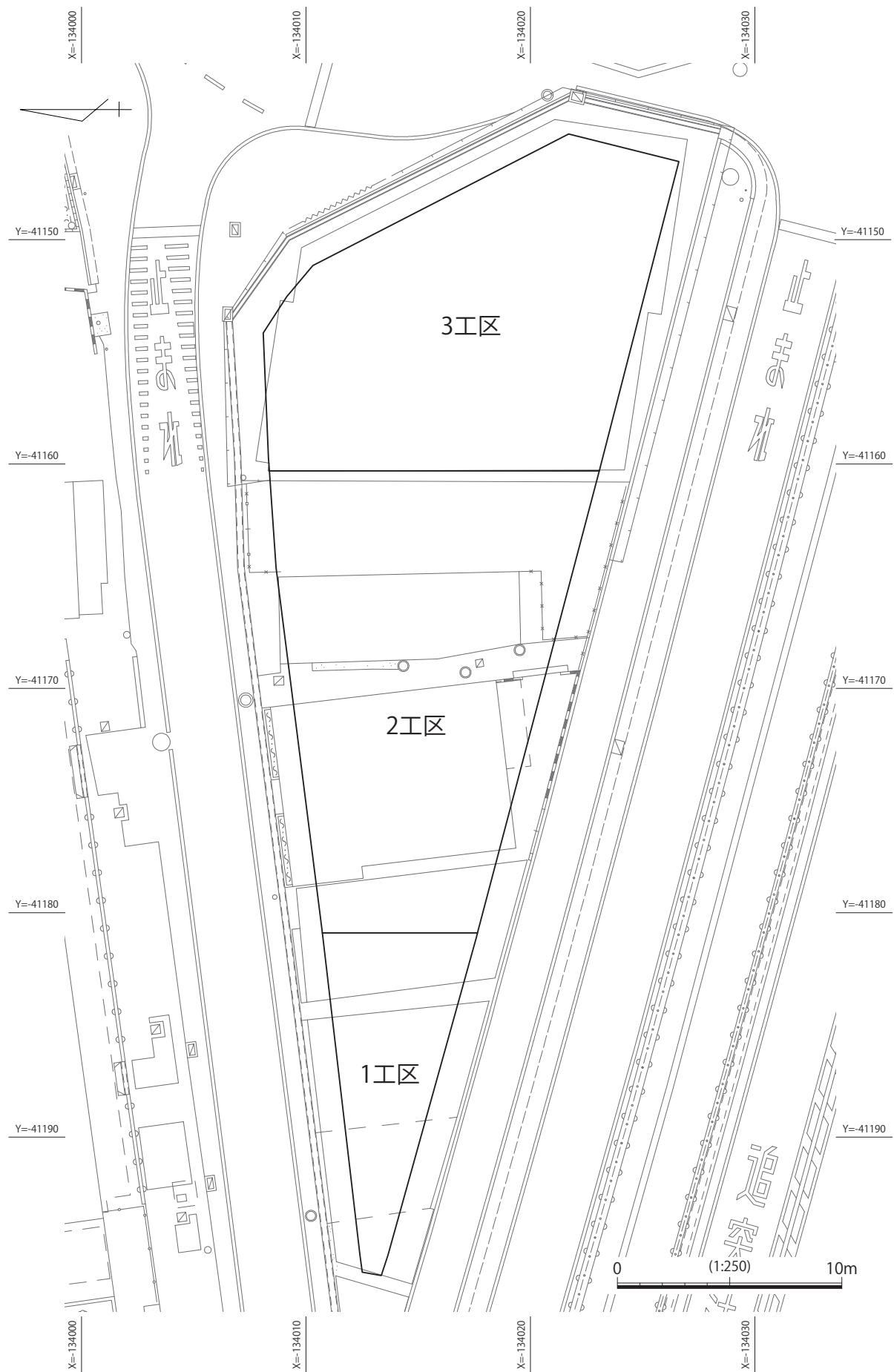
第3遺構面精査時に検出された遺物は、1区から出土した縄文時代の凹基無茎式石鏃、同じく1区から内面に布目痕がみとめられる丸瓦、2区から風化が進んだサヌカイトの剝片が出土した。

第2遺構面と第3遺構面では、遺構の検出状況から時期差はあるが、遺物の出土が希薄で明確な時期差を確認することはできなかった。ただ大枠では第2遺構面は近世、第3遺構面は近世以前の可能性がある。

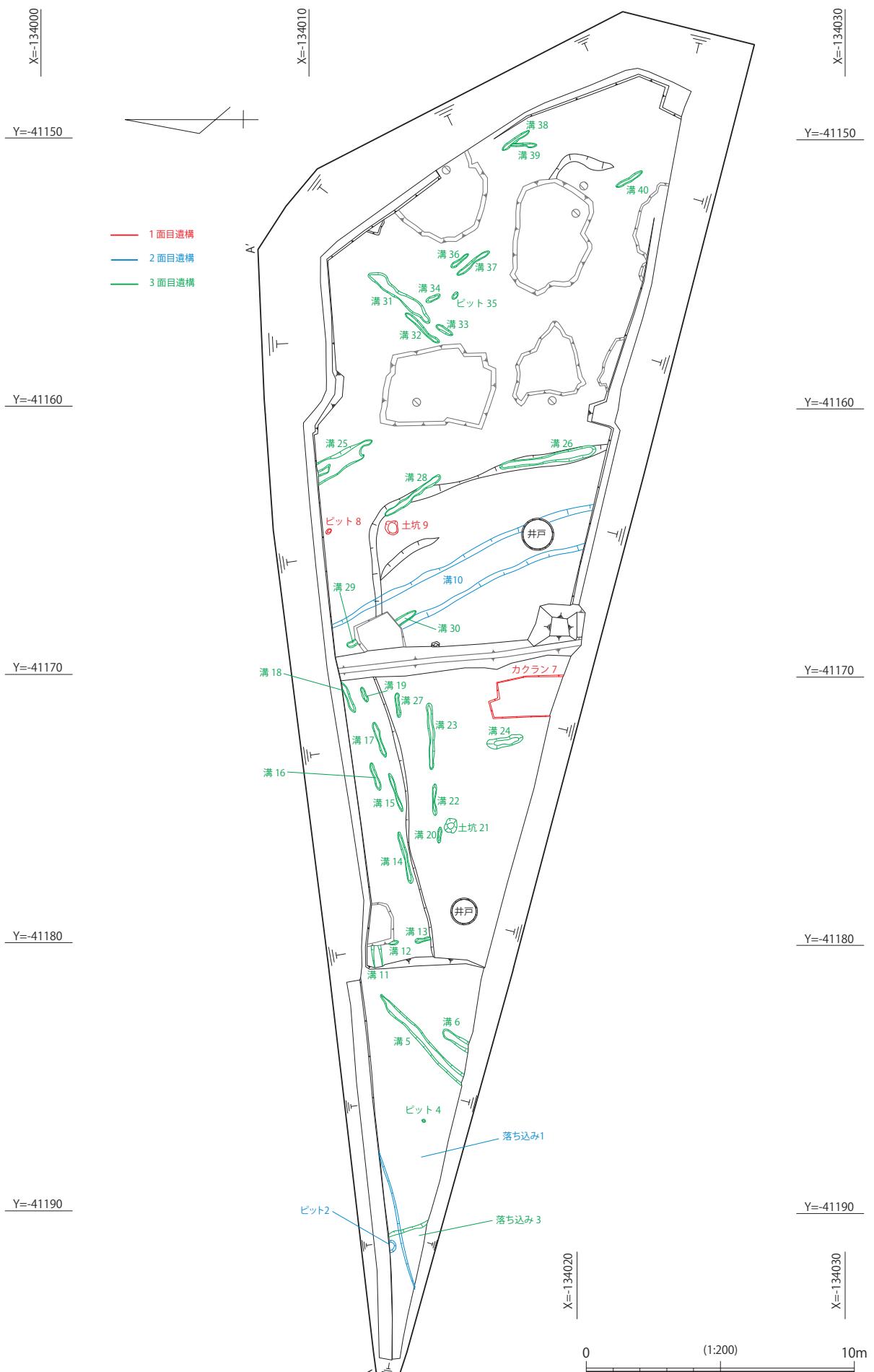
第3遺構面も第1遺構面、第2遺構面と同様に建物跡はなく江戸時代までに形成された耕作土の堆積だと思われる。



第5図 調査区北壁土層断面図 水平1:100 垂直1:50



第6図 調査区区割図 1:250



第7図 遺構配置図 1:200

第4章 調査成果

第1節 検出された遺構

今回の発掘調査においては、解体工事の進捗状況の影響もあり1区から3区に分けての調査となった。遺構番号は1区第1面から3区第3面まで遺構の種類に関係なく、検出された順番に通し番号をつけた。したがって1区の第1面では遺構がなかったが、第2面、第3面には遺構の検出があったので、2区の第1面ではピット8というように各面で番号が通らない遺構番号となる。

また今回の発掘調査では明確な建物となるような柱穴の検出はなかった。よって便宜上、小型の径を持つ穴をピット、比較的大型の径を持つ穴を土坑とした。

第1遺構面の遺構

1区

旧耕作土を除去し、精査を行ったが、第1遺構面での遺構は検出されなかった。

2区

北側東端でピット8を検出した。検出面の高さはT.P.+9.08mで深さは3cm、径16cm、埋土は炭粒少量混ざる灰白色(7.5Y7/1)砂質土。ピット8の南側に土坑9を検出した。検出面の高さはT.P.+9.05mで深さは5cm、径50cm、埋土は炭粒少量混ざる灰色(7.5Y6/1)砂質土。2区の遺構はピット8と土坑9で、2つは、南北に並ぶが建物跡と特定できるような状況ではなかった。南北に並ぶ事から簡易な柵列の可能性は残す。またこの面からカクラン坑7が検出された。カクラン坑7は、攪乱ではあるが、近代化に至る生活道具が比較的良好な状況で収集する事ができた。詳細は第2節、検出された遺物にて報告する。

3区

第1遺構面相当面で精査を行ったが整地層のみの検出で遺構は確認できなかった。

第2遺構面の遺構

1区

1区調査区の西端より落ち込み1を検出した。検出面の高さはT.P.+8.75mで深さは8cm、埋土は明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土。北から南への落ち込み。

落ち込み1の北側にピット2を検出した。検出面の高

さはT.P.+8.74mで深さは6cm、調査区の端で全容は分からぬが推定される径は46cm、埋土は、にぶい黄橙色(10YR2/7)粘質土でマンガン斑を含む。

落ち込み1からは染付椀、土師器高杯、和泉型瓦器椀、樟葉型瓦器碗が出土した。

2区

調査区東側で北西から南東に向けて溝10を検出した。幅1.55m、確認された長さは約11m、検出面の高さはT.P.+8.74mで深さは5cm、埋土は灰色(N5/0)粘質土。2区で検出された溝は第3面で検出された落ち込みのラインと角度的に近く当該地が正南北ではなく北東から南西にむけて傾斜した地割が想定される。2区の第2遺構面で落ち込みの区画が検出された。

溝10からは樟葉型瓦器椀、和泉型瓦器碗が出土した。

3区

第1遺構面相当面をさらに掘削したら明確な攪乱が確認できた。確認の範囲を明確にし、記録写真を撮影した。遺構の検出はなかった。

第3遺構面の遺構

1区

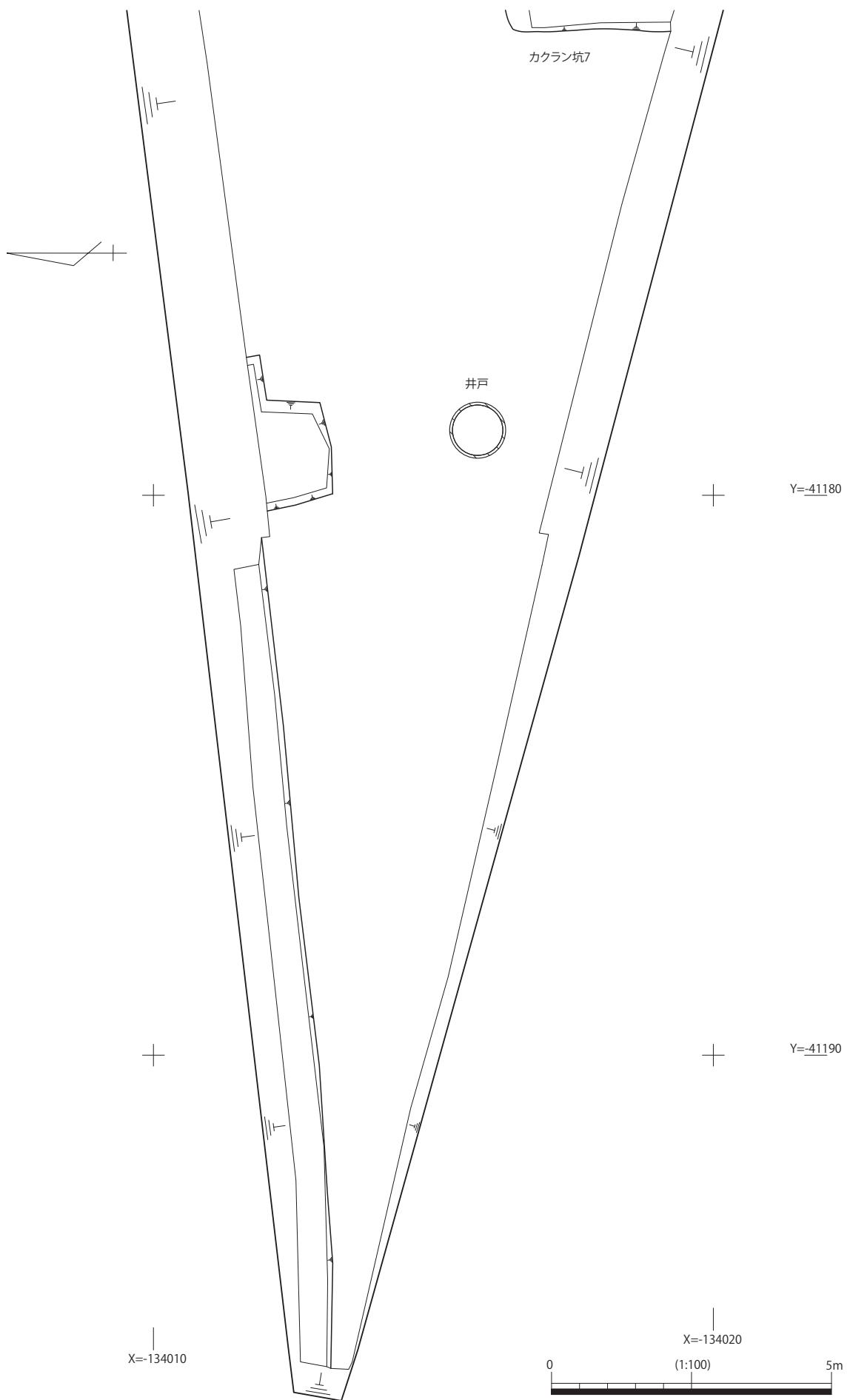
調査区西端からほぼ南北方向の落ち込み3を検出した。検出面の高さはT.P.+8.67m深さは8cm、西から東への傾斜。1区中央あたりで、ピット4を検出した。検出面の高さはT.P.+8.65mで深さは4cm、径は12cm。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)粘質土。

調査区東端から溝5を検出した。検出面の高さはT.P.+8.65mで深さは5cm、幅は34cm。埋土は黄橙色(10YR8/6)混砂土。残存していた長さは、4.2m。溝5と並行して南側に溝6を検出した。検出面の高さはT.P.+8.56mで深さは6cm、幅は29cm。埋土は浅黄橙色(10YR8/3)混砂土。残存していた長さは1m。溝5、溝6ともに北東から南西へ傾いている。後述する第3遺構面の溝群とは明らかに角度が異なる。2区・3区との区画プランとは明確に異なる。この溝列の性格は不明だが里道の可能性がある。

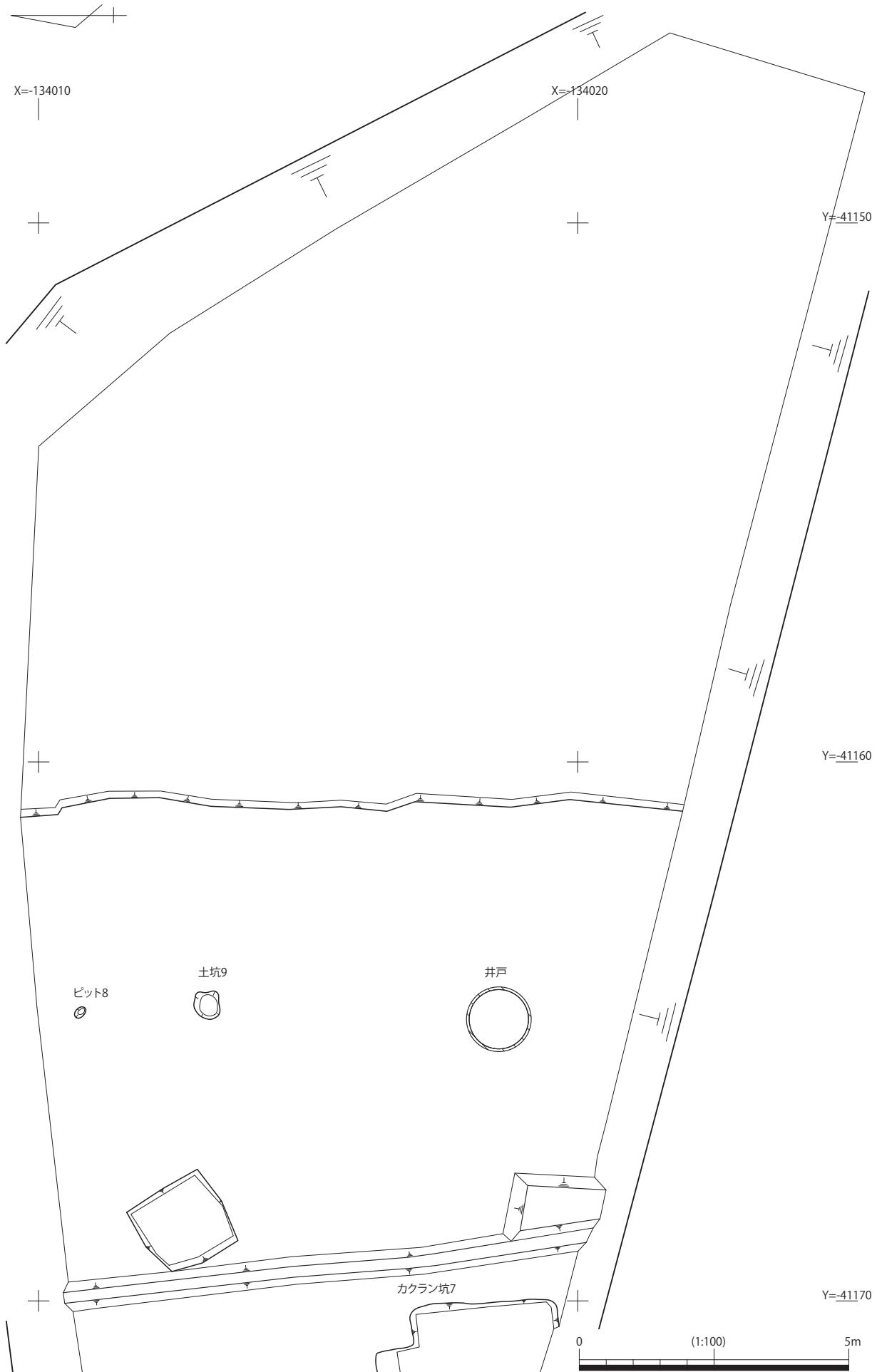
遺構内ではないが、1区の第3遺構面精査時に凹基無形式石鏸が出土した。

2区

1区境の攪乱と2区の攪乱に挟まれた形で溝11を検出した。検出面の高さはT.P.+8.68mで深さは5cm、幅は35cm。埋土は灰色(10YR7/1)粘質土。残存して



第8図 第1遺構面 調査区平面図(1) 1:100



第9図 第1遺構面 調査区平面図(2) 1:100

いた長さは、1 m。溝の方向は、ほぼ東西。

溝 11 の南側に攪乱により削平されていたが、僅かながら残存する形で溝 12 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.69 m で深さは 3 cm、幅は 17 cm。埋土は灰色(10 YR 7/1) 粘質土。残存していた長さは、50 cm。溝の方向は、ほぼ南北。

溝 12 の南下に溝 13 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.71 m で深さは 3 cm、幅は 11 cm。埋土は浅黄橙色(10 YR 8/3) 粘質土。残存していた長さは、50 cm。溝の方向は、ほぼ南北。

溝 11、溝 12、溝 13 は残存状況が悪かったが、他の溝群とは異なり、正南北方向に近い区画が見られる。

溝 14、溝 16、溝 18 が直線で並ぶ形で検出された。溝 14 は検出面の高さは T . P . + 8.71 m で深さは 2 cm、幅は 11 cm。埋土はにぶい黄橙色(10 YR 7/2) 粘質土。残存していた長さは、2 m。溝の方向は、北東から南西へ若干傾いている。

溝 14 につながる形で溝 16 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.73 m で深さは 3 cm、幅は 14 cm。埋土はにぶい灰色(10 YR 8/2) 粘質土。残存していた長さは、1 m。溝の方向は、北東から南西へ若干傾いている。

溝 14、溝 16 に繋がる形で溝 18 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.73 m で深さは 4 cm、幅は 16 cm。埋土は灰色(10 YR 8/2) 粘質土。残存していた長さは、1 m。溝の方向は、北東から南西へ若干傾いている。

直線に並ぶ、溝 14、溝 16、溝 18 の南側に並行して、溝 15、溝 17、溝 19 が直線的に並ぶ形で検出された。

溝 15 は検出面の高さは T . P . + 8.70 m で深さは 1 cm、幅は 8 cm。埋土はにぶい黄橙色(10 YR 7/2) 粘質土。残存していた長さは、1.6 m。溝の方向は、北東から南西へ若干傾いている。

溝 15 とつながる形で溝 17 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.73 m で深さは 2 cm、幅は 14 cm。埋土はにぶい黄橙色(10 YR 7/2) 粘質土。残存していた長さは、1.6 m。溝の方向は、北東から南西へ若干傾いている。

溝 17 につながる形で溝 19 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.74 m で深さは 3 cm、幅は 16 cm。埋土はにぶい黄橙色(10 YR 7/2) 粘質土。残存していた長さは、1.6 m。溝の方向は、北東から南西へ若干傾いている。

溝 14 から溝 19 は、直線で並び、傾きにも規格性がみられる、上面が削平されているが、本来は 2 条の溝が並んでいたものと考えられる。このような溝群は通常、鋤溝というくくりで分類される事が多いが、今回の検出状況では幅約 75 cm の里道の側溝の可能性が高いものと考える。

里道の可能性がある溝群の南に溝 20、溝 22、溝 23 がほぼ正東西に並ぶ形で検出された。

溝 20 は検出面の高さは T . P . + 8.66 m で深さは 4 cm、幅は 12 cm。埋土は灰色(10 YR 7/2) 粘質土。残存していた長さは、50 m。溝の方向は、ほぼ正東西である。

溝 20 につながる形で溝 22 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.67 m で深さは 1 cm、幅は 9 cm。埋土はにぶい黄橙色(10 YR 7/2) 粘質土。残存していた長さは、1.2 m。溝の方向は、ほぼ正東西である。

溝 22 につながる形で溝 23 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.68 m で深さは 7 cm、幅は 16 cm。埋土はにぶい黄橙色(10 YR 7/2) 粘質土。残存していた長さは、2.6 m。溝の方向は、ほぼ正東西である。

溝 20 ~ 溝 23 は、ほぼ東西に並ぶ。この東西の溝と直交する形で北側の溝 12、13 が位置する。里道に伴う区画と別の区画が同一面で見えている。里道の溝か鋤溝かは判然としない。また時代を特定できるような遺物の出土がなかったので年代差は不明である。

溝 23 の北側に並行する位置に溝 27 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.69 m で深さは 2 cm、幅は 14 cm。埋土はにぶい灰白色(10 YR 8/1) 粘質土。残存していた長さは、80 m。溝の方向は、ほぼ正東西である。

溝 20 の南側に土坑 21 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.63 m で深さは 11 cm、径は 51 cm。埋土は灰白色(10 YR 7/1) 粘質土。土坑の西側はほぼ直に落ち、東側はなだらかに落ちている。第 3 遺構面の遺構のなかでは、比較的しっかりした掘肩をもつ。周囲に土坑はなく単独の検出で、建物跡を想定する事はできなかった。

2 区南で溝 24 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.59 m で深さは 5 cm、幅は 33 cm。埋土はにぶい褐灰色(10 YR 6/1) 粘質土。残存していた長さは、1 m。溝の方向は、ほぼ正南北である。周囲に溝がなく直線的なつながりは不明である。

2 区北東端で溝 25 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.84 m で深さは 2 cm、幅は 63 cm。埋土はにぶい褐灰色(10 YR 6/1) 粘質土。残存していた長さは、2.4 m。溝の方向は、北西から南東である。残存状況は悪いが周辺の溝群と比べると比較的大型な溝である。

2 区調査区南東端に溝 26 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.77 m で深さは 2 cm、幅は 23 cm。埋土はにぶい灰白色(10 YR 8/1) 粘質土。残存していた長さは、3.2 m。溝の方向は、ほぼ南北である。

溝 26 の北に延長する位置に溝 28 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.80 m で深さは 4 cm、幅は 26 cm。埋土はにぶい灰白色(10 YR 8/1) 粘質土。残存していた

長さは、2.8 m。溝の方向は、北西に傾いている。

2区北端に攪乱に挟まれる形で溝 29 と溝 30 を検出した。溝 29 の検出面の高さは T . P . + 8.69 m で深さは 4cm、幅は 21cm。埋土は灰白色 (10 YR 8/2) 粘質土。溝 30 の検出面の高さは T . P . + 8.70 m で深さは 5cm、幅は 28cm。埋土は灰白色 (10 YR 8/2) 粘質土。

3区

3区北側より溝 31 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.76 m で深さは 3cm、幅は 29cm。埋土は灰色 (5 Y 6/1) 粘質土。残存していた長さは、3.8 m。溝の方向は、北東から南西に傾いている。2区北西の溝群とは明らかに地割が異なる。1区で検出した溝 5・6 とはほぼ並行な位置関係にある。

溝 31 の北側に並行して溝 32 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.76 m で深さは 1cm、幅は 17cm。埋土は灰色 (5 Y 6/1) 粘質土。残存していた長さは、2.0 m。溝の方向は、溝 31 と同様に北東から南西に傾いている。

溝 31 の延長に溝 33 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.74 m で深さは 2cm、幅は 20cm。埋土は灰色 (5 Y 6/1) 粘質土。残存していた長さは、1.0 m。溝の方向は、溝 31 と同様に北東から南西に傾いている。溝 31 から溝 33 は、残存状況の違いでできたもので、本来は、1 本の溝であったと思われる。

溝 31 の南側に溝 34 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.75 m で深さは 3 cm、幅は 18cm。埋土は褐灰色 (10 YR 6/1) 粘質土。残存していた長さは、0.5 m。溝の方向は、北西から南東に傾いている。

溝 34 の南に溝 36 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.75 m で深さは 2 cm、幅は 12cm。埋土は褐灰色 (10 YR 6/1) 粘質土。残存していた長さは、0.8 m。溝の方向は、北西から南東に傾いている。

溝 36 と並行して溝 37 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.74 m で深さは 3cm、幅は 14cm。埋土は褐灰色 (10 YR 6/1) 粘質土。残存していた長さは、0.8 m。溝の方向は、北西から南東に傾いている。

溝 34 から溝 37 は残存状況に違いがあるだけで、本来は 1 本の溝だと思われる。先述した溝 31 を中心とした溝群とはほぼ直角に交わる。また 1 区の溝 5・6 ともほぼ直角に交わる。

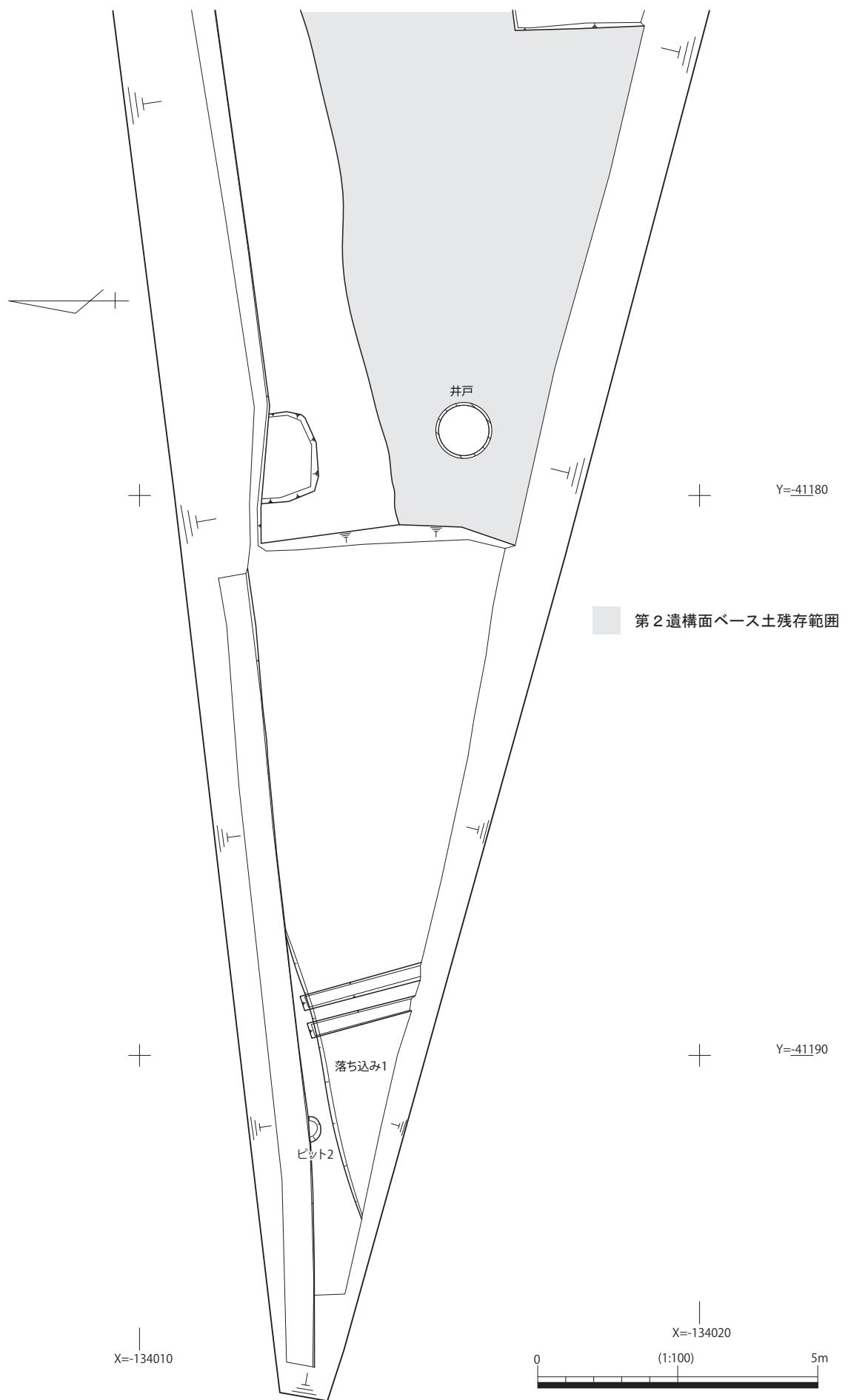
溝 37 の西側のピット 35 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.76 m で深さは 3cm。径は楕円形で最大 40cm。埋土は褐灰色 (10 YR 6/1) 粘質土。ここではピットとして報告したが、掘肩が浅く、溝とピットと明確に分けることはできないような検出状況である。

3区北東に溝 38 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.74 m で深さは 3cm、幅は 15cm。埋土は褐灰色 (10 YR 6/1) 粘質土。残存していた長さは、1.2 m。溝の方向は、北西から南東に傾いている。

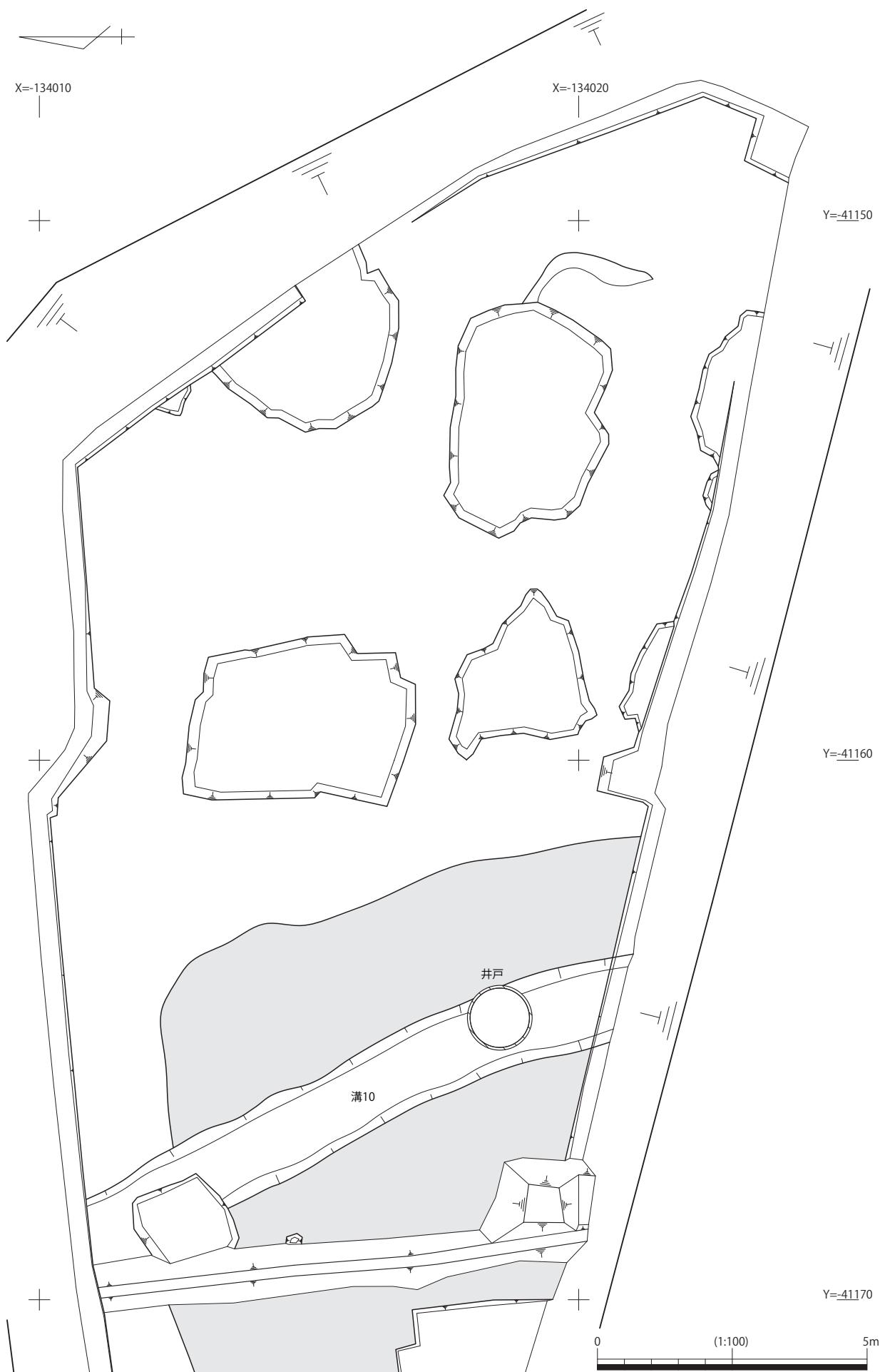
溝 38 に交わる形で溝 39 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.74 m で深さは 4cm、幅は 12cm。埋土は褐灰色 (10 YR 4/1) 粘質土。残存していた長さは、1.2 m。溝の方向は、北西から南東に傾いている溝 38 に北向けにまっすぐ直行する。

3区北東隅に溝 40 を検出した。検出面の高さは T . P . + 8.68 m で深さは 3cm、幅は 17cm。埋土は褐灰色 (10 YR 6/1) 粘質土。残存していた長さは、1.2 m。溝の方向は、北西から南東に傾いている。

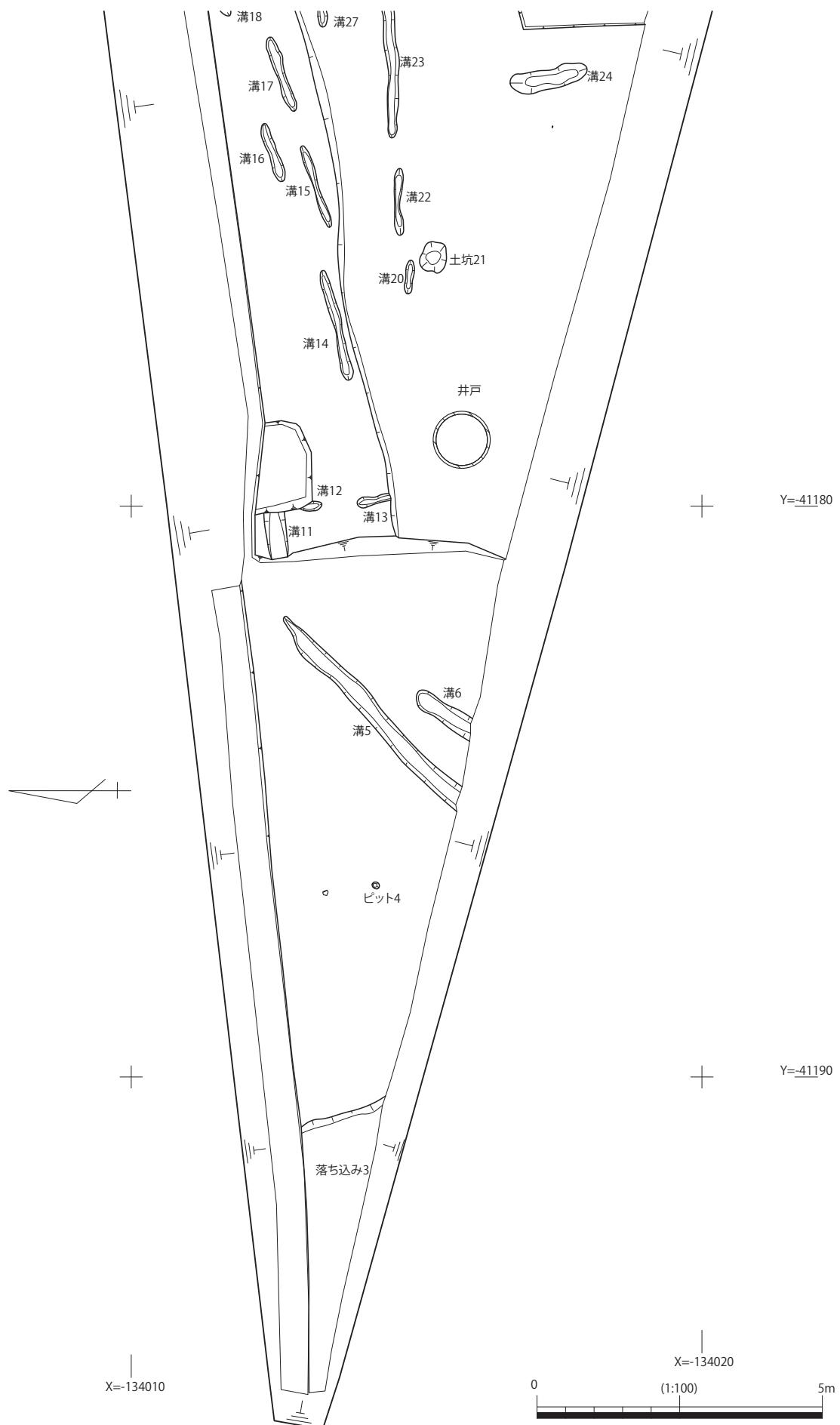
3区における溝群は 2 区の溝群とは違う地割が想定される。溝 31 を中心とした溝群と直交する溝 37 を中心とした溝群と直行する関係にある。



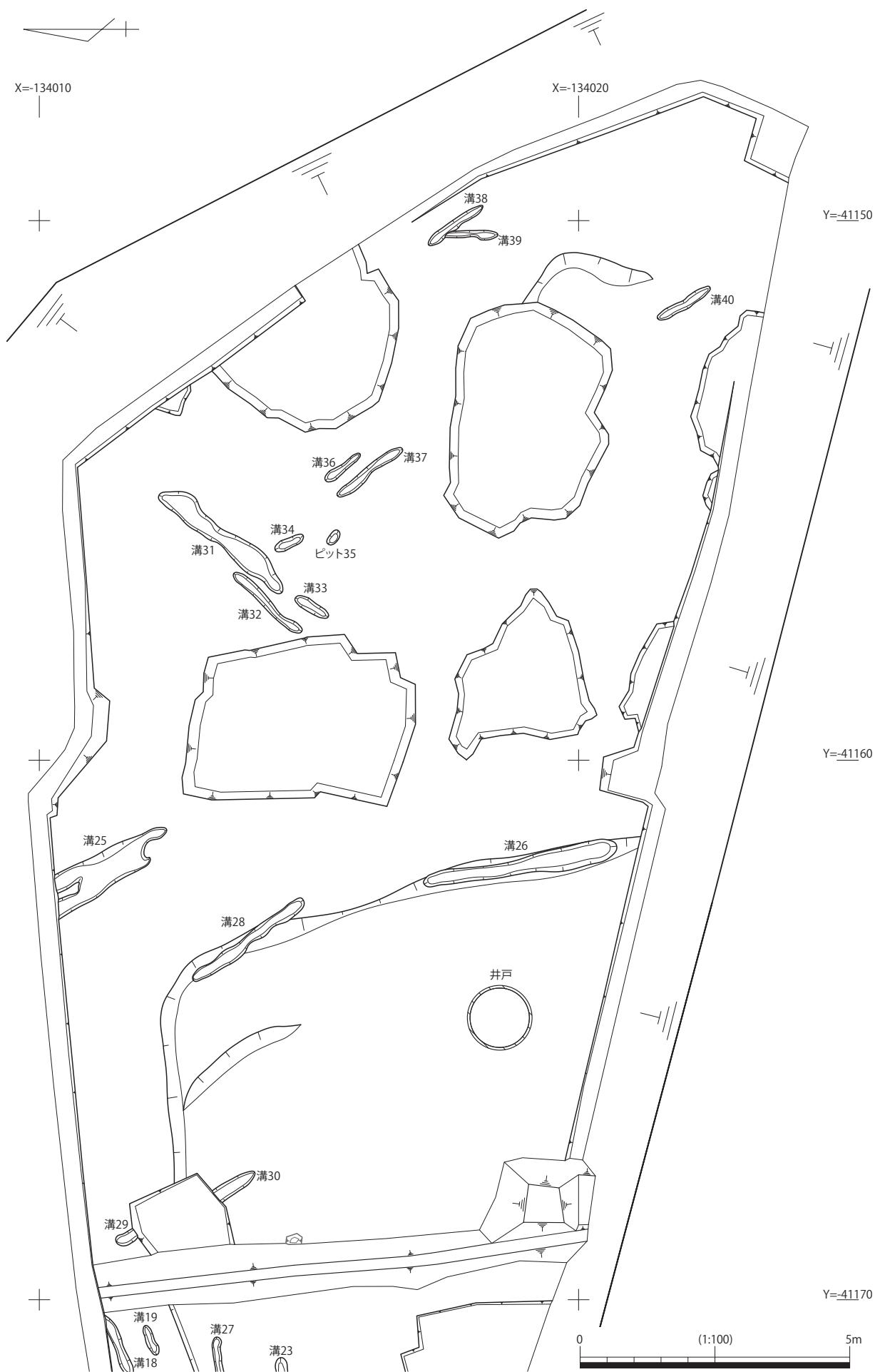
第10図 第2遺構面 調査区平面図(1) 1:100



第11図 第2遺構面 調査区平面図(2) 1:100



第12図 第3遺構面 調査区平面図(1) 1:100



第13図 第3遺構面 調査区平面図(2) 1:100

第2表 遺構一覧表

+は以上を示す

地区名	遺構番号	遺構種別	検出面	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	おもな埋土	備考
1区	1	落ち込み	第2面	-	2.5+	0.07	明黄褐色粘質土	
1区	2	ピット	第2面	0.45	0.21+	0.07	にぶい黄橙色粘質土	北側は側溝によって削平される
1区	3	落ち込み	第3面	-	4.92+	0.12	灰黄褐色粘質土	
1区	4	ピット	第3面	0.12	0.11	0.03	灰黄褐色粘質土	
1区	5	溝	第3面	4.43+	0.3	0.03	黄橙色混砂土	調査区外に続くため南側端部は確認できず
1区	6	溝	第3面	1.12+	0.31	0.03	浅黄橙色混砂土	調査区外に続くため南側端部は確認できず
2区	7	カクラン	第1面	3.2+	1.6	0.52	整地層	調査区外に続くため南側端部は確認できず
2区	8	ピット	第1面	0.24	0.16	0.02	褐灰色粘質土	
2区	9	土坑	第1面	0.55	0.46	0.05	灰色砂質土	
2区	10	溝	第2面	10.6	1.3	0.04	灰色粘質土	調査区外に続くため南北端部は確認できず
2区	11	溝	第3面	0.8+	0.35	0.04	灰白色粘質土	西側を側溝に、東側を攪乱の削平を受ける
2区	12	溝	第3面	0.27+	0.17	0.03	灰白色粘質土	北側を攪乱によって削平される
2区	13	溝	第3面	0.6+	0.12	0.04	浅黄橙色粘質土	南側を地形によって削平される
2区	14	溝	第3面	1.94	0.13	0.02	にぶい黄橙色粘質土	
2区	15	溝	第3面	1.5	0.07	0.02	にぶい黄橙色粘質土	
2区	16	溝	第3面	1.0	0.14	0.03	灰白色粘質土	
2区	17	溝	第3面	1.37	0.14	0.01	にぶい黄橙色粘質土	
2区	18	溝	第3面	1.16	0.15	0.04	灰白色粘質土	
2区	19	溝	第3面	0.57	0.16	0.02	にぶい黄橙色粘質土	
2区	20	溝	第3面	0.59	0.12	0.05	灰白色粘質土	
2区	21	土坑	第3面	0.5	0.43	0.1	灰白色粘質土	
2区	22	溝	第3面	1.17	0.08	0.01	にぶい黄橙色粘質土	
2区	23	溝	第3面	2.48	0.16	0.07	にぶい黄橙色粘質土	
2区	24	溝	第3面	1.37	0.34	0.06	褐灰色粘質土	
2区	25	溝	第3面	2.31+	0.62	0.02	褐灰色粘質土	北側を側溝によって削平される
2区	26	溝	第3面	3.62	0.26	0.02	灰白色粘質土	
2区	27	溝	第3面	0.91	0.12	0.01	灰白色粘質土	
2区	28	溝	第3面	2.51	0.22	0.03	灰白色粘質土	
2区	29	溝	第3面	0.41+	0.2	0.04	灰白色粘質土	南側を攪乱によって削平される
2区	30	溝	第3面	0.84+	0.27	0.04	灰白色粘質土	北側を攪乱によって削平される
3区	31	溝	第3面	1.65	0.16	0.01	灰色粘質土	
3区	32	溝	第3面	2.9	0.29	0.02	灰色粘質土	
3区	33	溝	第3面	0.6	0.2	0.02	灰色粘質土	
3区	34	溝	第3面	0.57	0.17	0.03	褐灰色粘質土	
3区	35	ピット	第3面	0.31	0.16	0.04	褐灰色粘質土	
3区	36	溝	第3面	0.8	0.12	0.01	褐灰色粘質土	
3区	37	溝	第3面	1.4	0.14	0.03	褐灰色粘質土	
3区	38	溝	第3面	1.24	0.14	0.03	褐灰色粘質土	
3区	39	溝	第3面	0.96+	0.12	0.04	褐灰色粘質土	
3区	40	溝	第3面	1.12	0.17	0.02	褐灰色粘質土	

第2節 出土した遺物

出土遺物について概観する。まず、遺物包含層からの出土遺物が示す時代は、縄文時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の6時期であった。弥生時代と奈良時代のものは確認できなかった。

これらのうち、土器・陶磁器は小片で表面が磨滅し出土量が少ない。このことは、調査地が江戸時代以前の各時代の集落から離れたところにあることを示している。

次に、検出遺構からは第2遺構面2区（瓦器、土師器、須恵器、染付）と第3遺構面2区（瓦器、土師器）の計4地点で土器類が出土した。これらは表面が磨滅した小片で出土量もごくわずかであり、遺物包含層の出土遺物の傾向と同様、集落から離れたところにあることを示すものである。

一方、盛土やその直下の耕作土、攪乱坑等から出土した土器・陶磁器類は、表面の磨滅はなく、破片は大きく出土量も多い。それらが示す時代は、明治時代以降、とりわけ昭和時代を中心とみられる。調査地西隣のJR千里丘駅⁽¹⁾は1938（昭和13）年に開業しているが、駅開業後に進んだ宅地開発により、調査地が空閑地・耕作地から住宅地へと変容していく様をこれら出土遺物は示している。以下遺構や層位別に出土遺物について述べる。

詳細な点は表3の遺物観察表に記した。

落ち込み1（第14図）

1は土師器高杯の脚部である。杯部との接合部付近の小片が残る。色調は表面が少し赤色味を帯びた灰白色で胎土は砂粒を含みやや粗い。内外面とも表面が磨滅し調整等は不明である。

2は瓦器椀である。口縁部の小片が残る。口縁端部は丸くおさめる。胎土は精良である。表面が磨滅しヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

3は瓦器椀である。口縁部の小片が残る。口縁端部は丸くおさめる。胎土は精良である。表面が磨滅しヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

4は瓦器椀である。底部の小片が残る。高台はおおむね断面三角形の低いものである。胎土は精良である。表面が磨滅しヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の楠葉型とみられる。

5は染付椀である。口縁部から体部の小片が残る。体部がわずかに外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさ

める。口縁端内面に四方櫛を、体部外面には筐葉を、それぞれ細線書きで描く。

6は瓦器椀である。口縁部の小片が残る。口縁端部内面に一条の沈線を認める。胎土は精良である。全体に表面が磨滅してヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の楠葉型とみられる。

7は瓦器椀である。底部の小片が残る。形骸化した高台を貼り付ける。胎土は精良である。全体に表面が磨滅して炭素が剥落しており、ヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

8は土師器皿である。口縁部の小片が残る。色調は赤色味を帯びた淡灰白色で胎土は精良である。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。

カクラン坑7（第14・15図）

9は色絵磁器の皿である。口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。口縁部に五つの切り込みを入れて重ね、葉をかたどった意匠とする。見込みには型押しにより葉脈を陽刻する。わずかに青色味を帯びた釉が内外面に施釉され、全体に細かな貫入がみられる。外底面以外の外面は荒い布目を残して無調整とし、下半は露胎である。

10は色絵磁器の皿である。全体の1/4程度が残る。口縁部内面に淡黄緑色の二条の圈線を描く。磁胎は精良である。体部はゆるやかに屈曲して立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。低く角の丸い台形の高台で、畳付は露胎である。

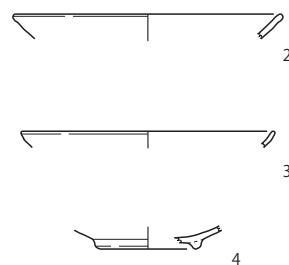
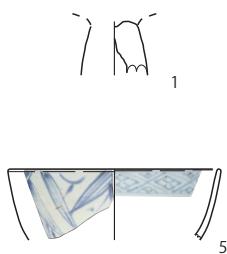
11は白磁の皿である。全体の1/4程度が残る。体部内面に型押しにより草文を陽刻する。体部はゆるやかに屈曲して立ち上がり口縁端部は小さく外反し丸くおさめ、口縁は菊花状とする。高台畠付は露胎である。

12は色絵磁器の皿である。全体の1/2が残る。菊花と菊葉を銅版転写により絵付する。絵付は一色刷であるが、口縁端部を口鉢状に仕上げることから色絵磁器とした。畠付は露胎である。なお本品は磁胎のきめが粗く黒色粒がみられるなど、瀬戸美濃系の可能性がある。銅版転写⁽²⁾は明治20年代以降、昭和初期にゴム版による絵付が登場するまで盛行した絵付技法であり、こうしたことから本品の年代観は19世紀末～20世紀に比定される。

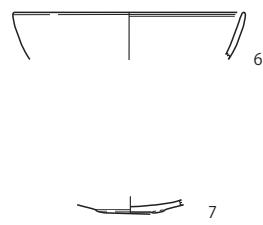
13は染付皿である。全体の1/3が残る。型紙摺により、見込みに松その他を描く。角の丸い台形の小さな高台で畠付は露胎である。

14は施釉陶器の壺型の容器である。底部の1/2と体部から口縁部の1/4が残る。淡灰色の精良な胎土で、内外面に淡黄緑色の釉が施釉される。底部下端から外底

落ち込み 1



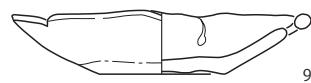
溝 10



溝 23



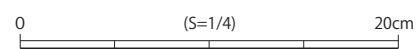
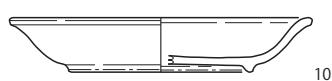
カクラン 7 (1)



12



13



第14図 出土遺物実測図 1 1:4

面は露胎で成形は削り出しによる。口縁端部上面と口縁部内面は釉を搔きとことから、蓋を伴うものであろう。

15は土師質土器の上置である。体部下端の小片が残る。色調は少し黄色味を帯びた淡灰白色で、胎土は砂粒を少し含み粗い。体部下端は水平の平坦面を持つが、共伴する他の上置に比べ幅広である。体部外面にススが付着するが、体部内面と底部外面にはススがみられない。

16は土師質土器の上置である。底のない器形で、口縁部から体部の小片が残る。色調は少し黄色味を帯びた淡灰白色で、胎土は砂粒を少し含み粗い。口縁部は玉縁状に成形され、体部は内湾して斜め上方へ立ち上がる。体部下端は平坦面を持つ。体部外面には、波状の櫛描文を横位に施した粘土板を貼り付けている。体部下端面を除いて全体にススが付着しており、器壁の細部は判然としない。本品は85に類似する。

17はガラス容器の化粧瓶と思われる。完形である。色調は無色透明で製品名や容量等を示す刻印等はなかった。

18はガラス容器の広口瓶である。完形である。色調は青色味を帯びた淡緑色で製品名や容量等を示す刻印等はなかった。

19は一文字軒瓦で雀口の一部である⁽³⁾。本品は小口面に「市場」「瓦常」の刻印がみられる。市場は本市制施行前の字名で千里丘6丁目付近に該当し、瓦常は当該地に現存の瓦常商店を指す。大正期から昭和41年まで達磨窯が稼働し、煙瓦の生産が行われていたという⁽⁴⁾

20は棟瓦（雁振瓦）の一部である。

遺物包含層（第16・17図）

21は土師器皿である。口縁部から体部の小片が残る。形態は体部の中位で外反する点が特徴で、口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。色調は赤色味を帯びた灰白色で胎土は精良である。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。本品はその形態から京都系土師器皿とみられ、14世紀後半～15世紀前後に比定される。

22は土師器皿である。口縁部から体部の小片が残る。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。色調は部分的に赤色味を帯びた灰白色で胎土は精良である。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。本品はその形態から京都系土師器皿とみられ、14世紀後半～15世紀前半に比定される⁽⁵⁾。

23は土師器皿である。口縁部の小片が残る。外反する器形で口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。色調は淡赤灰白色で胎土は精良である。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。本品はその形態から京都系土師器皿とみ

られ、14世紀後半～15世紀前半に比定される⁽⁶⁾。

24は土師器皿である。口縁部から体部の小片が残る。形態は体部の中位で外反する点が特徴で、口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。色調は褐色味を帯びた灰白色で胎土は精良である。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。本品はその形態から京都系土師器皿とみられる⁽⁷⁾。

25は土師器皿である。口縁部の小片が残る。色調は淡赤灰白色で胎土は砂粒をわずかに含み精良である。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。

26は瓦器椀である。口縁部の小片が残る。口縁端部は丸くおさめる。全体に表面が磨滅してヘラ磨き等調整は不明である。胎土は精良である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

27は瓦器椀である。底部の小片が残る。胎土は細砂粒を含む。全体に表面が磨滅してヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

28は瓦器椀である。底部の小片が残る。胎土は精良である。全体に表面が磨滅して炭素が剥落しており、ヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

29は瓦器椀である。口縁部の小片が残る。胎土はやや粗い。全体に表面が磨滅してヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

30は瓦器椀である。底部の小片が残る。形骸化した高台を貼り付ける。胎土は細砂粒を含み精良である。全体に表面が磨滅して炭素が剥落しており、ヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

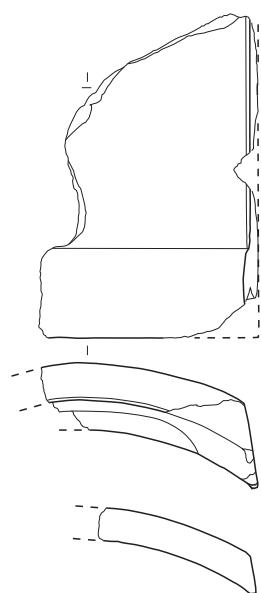
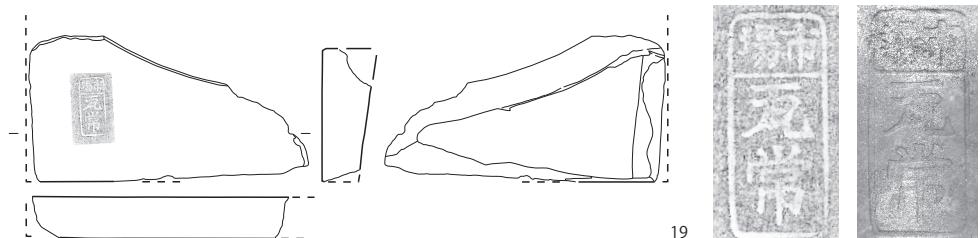
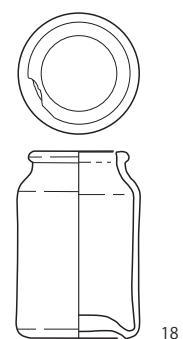
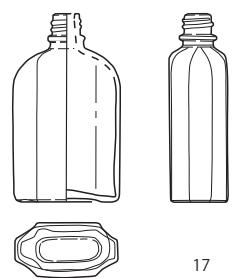
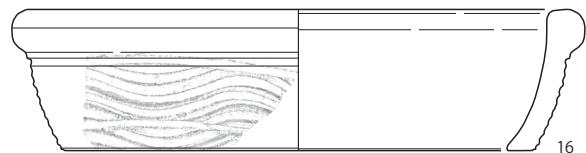
31は施釉陶器である。瓶型の頸部の小片が残る。色調は灰白色で胎土は精良である。外面と内面の上部に緑色味を帯びた灰白色的釉を施釉する。内面は回転ナデ痕が顕著である。

32は施釉陶器椀である。底部の1/4が残る。色調は灰白色で胎土は精良である。内面には黄色味を帯びた灰白色的釉を施釉し、細かな貫入がみられる。底部外面は低い高台を削り出す。本品は共伴する京都系土師器皿の年代観からみて、古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期の平椀の可能性が高く、15世紀前半に比定される⁽⁸⁾。

33は龍泉窯系青磁碗である。口縁小片が残る。体部外面に片彫蓮弁文。なお弁の中心に鎧はない。本品は、大宰府条坊跡の出土例では青磁碗Ⅱ類とされる製品の可能性が高く、13世紀前後～13世紀前半に比定される⁽⁹⁾。

34は青磁碗である。口縁部の小片が残る。口縁部は斜め外上方に開き、端部はわずかに外側へ肥厚し丸くおさめる。内外面とも青緑色の釉が施釉され細かな貫入がみられる。磁胎は灰白色できめがやや粗い。外面にかろ

カクラン7(2)



0 (S=1/4) 20cm

第15図 出土遺物実測図2 1:4

うじて蓮弁文を認める。

35は白磁碗である。口縁部の小片が残る。口縁端部は肥厚し玉縁状である。内外面とも施釉される。本品は、大宰府条坊跡の出土例では白磁碗IV類とされる製品で、11世紀後半～12世紀前半に比定される⁽¹⁰⁾。

36は白磁の皿である。底部の1/3が残る。見込みに段を認め、外底面に小さな高台を削り出す。磁胎はやや粗い。灰白色の釉を施釉し内外面に細かな貫入がみられる。高台外面は釉を搔きとる。本品は、大宰府条坊跡の出土例では白磁皿VII類とされる製品の可能性が高く、11世紀後半～12世紀前半に比定される⁽¹¹⁾。

37は土師器甕である。口縁部の小片が残る。口縁部は外上方に開き、端部は内傾して肥厚し面を持つ。色調は淡茶灰白色で胎土は砂粒を含み少し粗い。本品は口縁端部の形態から布留形甕とみられる。

38は瓦質土器の羽釜である。鍔部付近の小片が残る。口縁部は内傾して立ち上がる。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。外面に炭素吸着を認める。

39は常滑焼甕である。体部下端から底部の小片が残る。色調は淡赤灰色で、断面は灰白色である。胎土は白色や黒色細粒を含みやや粗い。内面に淡黄緑色の自然釉を認める。

40は染付碗である。口縁部から体部上半の小片が残る。型紙摺により口縁端部外面に囲線を、体部外面に斜格子文をそれぞれ描く。

41は染付皿である。底部の小片が残る。内傾気味の断面U字状の小さな高台で畳付は露胎である。細線書きにより文様を描く。

42は施釉陶器の皿である。底部の小片が残る。外底面の内側を高台状に削り出す。色調は赤色味を帯びたくすんだ灰白色で胎土はやや粗い。内面は緑色味を帯びた灰色釉を施釉し、高台部を含む外面は露胎である。

43は肥前系の施釉陶器の皿である。底部の1/2が残る。見込みに胎土目を認め、外底面を削り出して低い高台とする。色調は外底面が赤色味を帯びた灰色で胎土は砂粒を含みやや粗い。見込みと外面の一部に緑色味を帯びた灰色釉を施釉し、高台は露胎である。

44は東播系須恵器鉢である。口縁部の小片が残る。口縁端部が上方へ拡張し、端部外面は器壁に対して外傾する。本品は口縁部の形態からみてIII類とみられ、13世紀に比定される⁽¹¹⁾。

45は東播系須恵器鉢である。口縁部の小片が残る。口縁端部は上端が内側に巻き込む。焼成はやや軟質で色調は淡灰色である。胎土はやや粗い。本品は口縁部の形態からみてIV類とみられ、14世紀末に比定される⁽¹²⁾。

46は東播系須恵器鉢である。口縁部の小片が残る。口縁端部が上方へ拡張し、端部外面は器壁に対して外傾する。本品は口縁部の形態からみてIII類とみられ、13世紀に比定される⁽¹³⁾。

47は東播系須恵器鉢である。口縁部の小片が残る。口縁端部は上端が内側に巻き込む。色調は口縁外面が暗灰色、以外は灰色である。胎土は白色細粒を含みやや粗い。本品は口縁部の形態からみてIV類とみられ、14世紀末に比定される⁽¹⁴⁾。

48は東播系須恵器鉢である。口縁部の小片が残る。口縁端部は玉縁状で色調は口縁外面が暗灰色、以外は淡灰色である。胎土はやや粗い。本品は口縁部の形態からみてIV類とみられ、14世紀末に比定される⁽¹⁵⁾。

49は備前焼擂鉢である。口縁部の小片が残る。色調は暗赤灰色で、断面は暗紫灰色である。胎土は白色細粒を含み精良である。口縁部は上方にのび、上端は内傾する面を持つ。本品は口縁部の形態からみてV分類とみられ、16世紀に比定される⁽¹⁶⁾。

50は備前焼擂鉢である。体部下端の小片が残る。色調は赤灰白色である。胎土は赤色や黒色細粒を含み精良である。内面に条線を認める。

51は備前焼擂鉢である。体部下端の小片が残る。内面に条線を認める。色調は淡灰色で、断面は暗紫灰色である。胎土は白色細粒を含み精良である。本品はその質感が49に類似する。

52は平瓦の一部である。色調は黄色味を帯びた灰白色で胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。全体に表面が磨滅している。凹面に布目痕をみるとめる。

53は平瓦の一部である。色調は淡黒灰色である。胎土は砂粒を多く含み粗い。全体に表面が磨滅しているが、凹面に布目痕と凸面に繩叩き痕をそれぞれ認める。

54は平瓦の一部である。色調は淡黒灰色で胎土は砂粒を多く含み粗い。表面が磨滅して調整等は不明である。本品は、凹面狭端側に面取りを認め端部は外傾斜する面を持つことから、江戸時代以前の所産とみられる⁽¹⁷⁾。

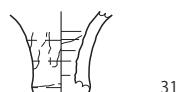
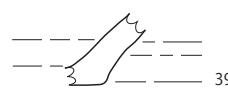
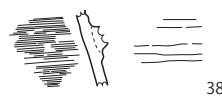
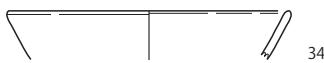
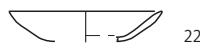
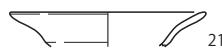
55は平瓦の一部である。色調は表面が淡黒灰色で断面は淡灰色である。胎土は砂粒を多く含み粗い。全体に表面が磨滅して調整等は不明である。

第2面ベース土・他（第18図）

56は須恵器の甕型の容器である。体部の小片が残る。色調は淡灰色で、胎土は白色砂粒を含み精良である。外面は格子風叩き目を認める。内面は同心円文を磨り消している。

57は土師器皿である。口縁部の小片が残る。色調は

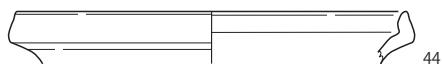
遺構包含層(1)



0 (S=1/4) 20cm

第16図 出土遺物実測図3 1:4

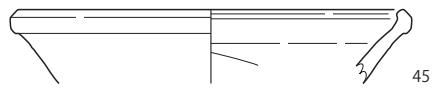
遺構包含層(2)



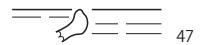
44



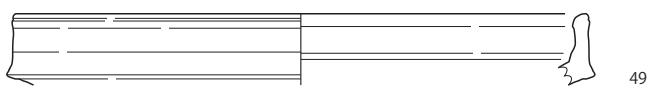
46



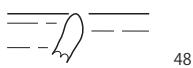
45



47



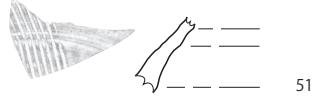
49



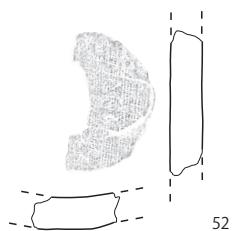
48



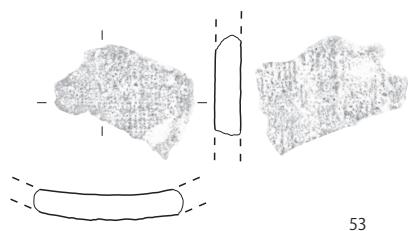
50



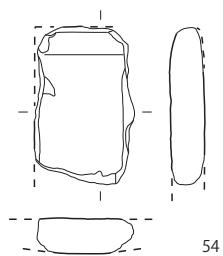
51



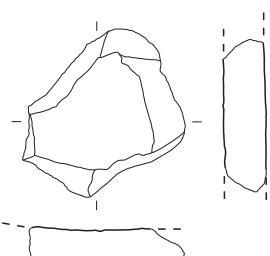
52



53



54



55

0 (S=1/4) 20cm

第17図 出土遺物実測図4 1:4

赤色味を帯びた灰白色で胎土は細砂粒を含み精良である。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。

58は土師器皿である。口縁部の小片が残る。色調は灰白色で胎土は精良である。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。

59は土師器皿である。口縁部から底部の小片が残る。色調は赤灰白色で胎土は細砂粒をわずかに含む。全体に表面が磨滅して遺存状態は悪い。

60は瓦器椀である。口縁部の小片が残る。口縁端部は丸くおさめる。胎土は精良である。全体に表面が磨滅してヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

61は瓦器椀である。口縁部の小片が残る。口縁端部は丸くおさめる。胎土は細砂粒をわずかに含む。色調は灰白色だが表面が火熱を受けて赤変している。全体に表面が磨滅して炭素が剥落しており、ヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

62は瓦器椀である。口縁部の小片が残る。口縁端部は丸くおさめる。胎土は砂粒をわずかに含む。全体に表面が磨滅しているが、内面にわずかにヘラ磨きをみとめる。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

63は瓦器椀である。口縁部から体部の1/4が残る。口縁端部は丸くおさめる。胎土は砂粒をわずかに含む。色調は灰白色で全体に表面が磨滅して炭素が剥落しており、ヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

64は瓦器椀である。底部の小片が残る。形骸化した高台を貼り付ける。胎土は細砂粒を含む。色調は灰白色で全体に表面が磨滅して炭素が剥落しており、ヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

65は瓦器椀である。底部の小片が残る。形骸化した高台を貼り付ける。胎土は細砂粒をわずかに含む。色調は灰白色で全体に表面が磨滅して炭素が剥落しており、ヘラ磨き等調整は不明である。本品はⅢ期以降の和泉型とみられる。

66は緑釉陶器椀である。底部の小片が残る。貼り付け輪高台で高台高は低い。胎土は精良で色調は淡灰色である。高台や外底面を含めて内外面とも淡灰緑色の釉が薄く施釉され、表面は平滑に仕上がっている。本品は高台の形状や製作技法からみて東海産の可能性が高い⁽¹⁸⁾。

67は平瓦の一部である。須恵質で色調は灰色である。胎土は砂粒を多く含み粗い。凹面に布目痕と凸面に繩叩き痕をそれぞれ認める。粘土板の接合痕がそのまま残り、粗製感のある製品である。

68は平瓦の一部（狭端部）である。色調は表面が淡黒灰色で断面は灰白色である。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。全体に表面が磨滅して調整等は不明である。

69は丸瓦の一部（肩部）である。玉縁は欠損している。色調は表面が淡黒灰色で断面は淡茶灰白色である。胎土は砂粒を多く含み粗い。全体に表面が磨滅しているが、凹面に布目痕をみとめる。

70は丸瓦の一部（肩部）である。玉縁は欠損している。色調は黄色味を帯びた灰白色で胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。全体に著しく磨滅しているが、凹面に布目痕をみとめる。

機械掘削（第19・20図）

71は須恵器蓋杯の蓋である。天井部の小片が残る。全体に表面が磨滅している。色調は青味を帯びた灰色で断面は少し赤紫色を帯びる。胎土は白色砂粒を含み精良である。外面はヘラ削り、内面はナデ調整を認める。

72は須恵器有蓋高杯の脚部小片である。全体に表面が磨滅している。色調は淡い灰色だが脚端部外面は暗灰色氣味である。胎土は砂粒を含み少し粗い。脚部の端部は丸くおさめ、シャープさに欠ける形状である。

73は染付椀である。口縁部から体部の小片が残る。体部がわずかに内湾し立ち上がり、外面は草花文を描く。

74は染付椀である。口縁部から体部の小片が残る。体部がわずかに外反して立ち上がり、口縁部内面に雷文を、外面に細線書きで松様の文を描く。

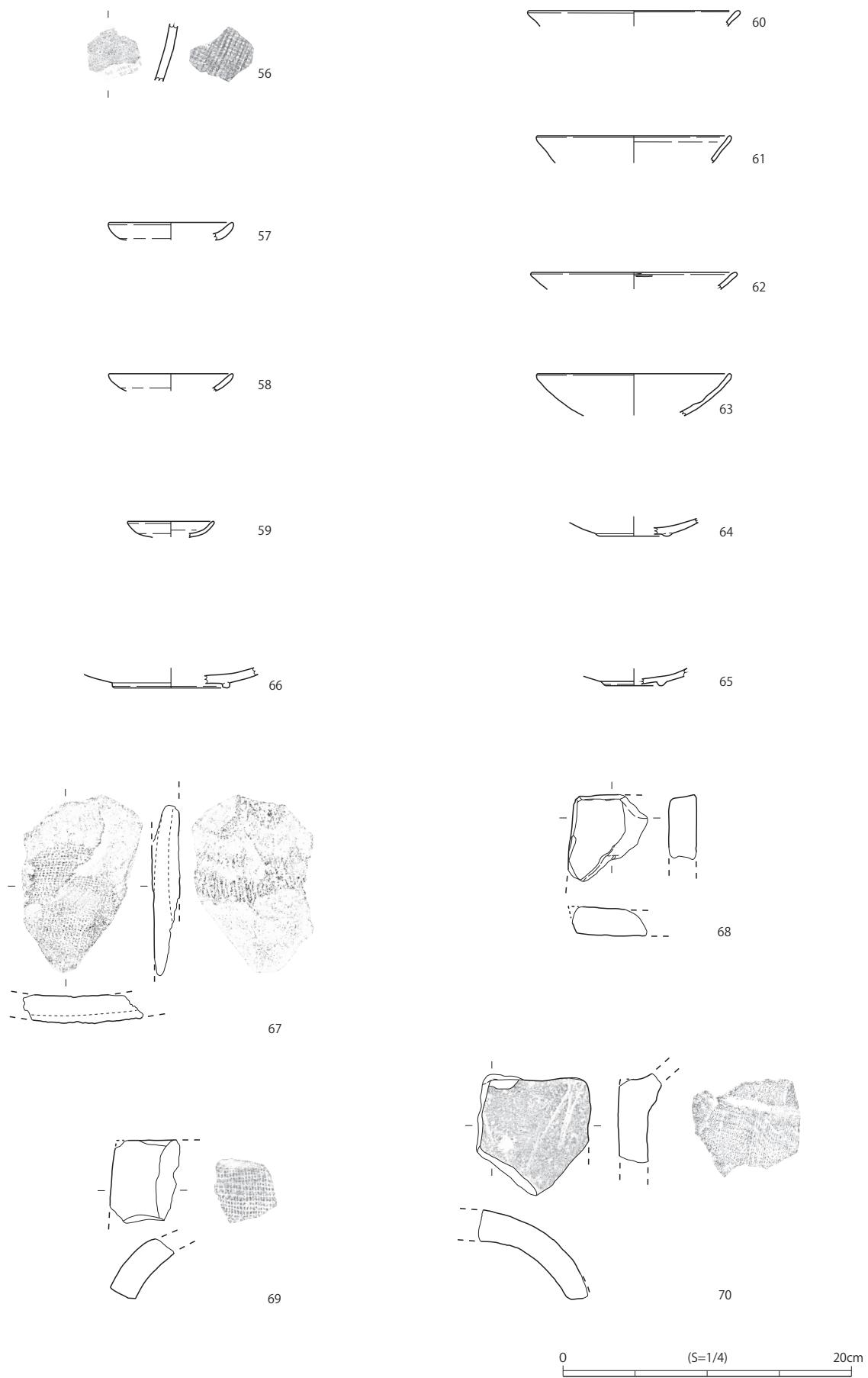
75は染付椀である。口縁部から体部の小片が残る。体部がわずかに外反して立ち上がり、口縁端部外面に二条の圈線、体部外面には型紙摺により草花文を描く。なお、型紙摺は明治10年頃から流行するという⁽¹⁹⁾。

76は染付蓋である。環状のつまみと天井部の小片が残る。外面に草文を、内面に二条の圈線と環状松竹梅文を描く。

77は染付椀である。体部下半の一部と高台部の2/3が残る。型紙摺により、体部外面に波文と圈線を、見込みには五弁花をそれぞれ描く。やや太いU字の高台で置付は露胎である。

78は色絵磁器の湯呑である。底部の4/5と体部の1/3が残る。体部がわずかに外反して立ち上がる。体部外面の上端に赤二条青一条の圈線を描く。内外面全体に細かな貫入がみられる。なお、本品を湯呑とすることについて新宿区市谷本村遺跡の近代以降の陶磁器出土例（（公財）東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター『市谷本村町遺跡 - 市ヶ谷警察総合庁舎の整備に伴う埋蔵文化財の調査（A区～C区）-』2023 第324図1・

第2面ベース土 他



第18図 出土遺物実測図5 1:4

2) に拠った。

79は色絵磁器の湯呑である。底部の全体と体部の1/2が残る。体部がわずかに外反して立ち上がる。体部外面の上端に赤二条青一条の圈線を描く。内外面全体に細かな貫入がみられる。なお本品は78に類似する。

80は施釉陶器の鉢である。口縁部から体部の小片が残る。部分的に緑色味を帯びた淡い黄釉が施釉され、胎土は砂粒を含まず精良である。体部から口縁端部へ内湾して立ち上がる。口縁部は内端面が少し肥厚し丸くおさめ、外端面は面取りする。なお体部外面下半は無釉である。

81は土師質土器の鉢型の容器の底部である。底部から体部の立ち上がりの小片が残る。色調は体部外面が濃暗灰色、外底面と体部内面は少し赤味を帯びた淡暗灰色である。胎土は砂粒をわずかに含み粗い。体部はわずかに外反して斜め上方へ立ち上がる。体部内面と内底面はそれぞれ異なるハケ状工具による調整痕が残る。また外底面には離れ砂がみられる。本品は全体にその断面が少し赤味を帯びており、これが火熱を受けたことによるものとみられることから、火鉢のような用途に供されたものとみられる。

82は施釉陶器の羽釜である。口縁部から鍔部の約1/4が残る。鉄製羽釜の形態を模した品である。色調は淡赤茶灰色で、胎土はわずかに砂粒を含みやや粗い。口縁部はやや内傾して斜め上方へ立ち上がり、幅約3cmの鍔がつく。内外面に淡茶色の釉が薄く施釉されるが、鍔部下面是無釉でスヌが付着する。

83は施釉陶器の鍋である。口縁部から体部の小片が残る。褐釉が施釉され、胎土は砂粒を含まず精良である。体部から口縁端部へ小さく段を作り、斜め上方へ立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外端面に把手を貼り付ける。外底面は無釉でスヌが付着する。

84は土師質土器の上置である。小片が残る。本品は粘土接合痕が全くなく、型押しによる成形とみられる。色調は灰白色で、胎土は砂粒をほとんど含まず少し粗い。口縁上端は平坦な面を持ち、体部はわずかに外反して斜め上方へ立ち上がる。体部内面は横ナデで内面下端は幅広に面取りする。体部下端は水平の面を持つ。体部外面は上端を浅く段を削り出す。スヌの付着がほとんど見られず器壁の遺存状態は良好である。体部外面の中位には、亀甲形の中に「信」字、また数字「186」を、それぞれ浅く打刻する。本品はその形態から85と同じく土師質土器の上置とみられるが、型押しによる成形や装飾がないなど、簡便な製作技法による製品である。

85は、他の出土例（公財）広島市文化財団『名勝平

和記念公園内遺跡 広島平和記念資料館本館下地点 - 本文編 -』2020 D3 区 SK4 出土品 第100図969）からみて、七輪やかまどなどの煮沸具とともに用いられる土師質土器の上置（うわおき）である。大正から昭和期、戦前のものと思われる。上置はここにちでも金属製のそれが生産・流通している。倒立した円錐の胴部を輪切りにしたような底のないかたちで、口縁部から体部の小片が残る。色調は少し黄色味を帯びた淡灰白色で、胎土は砂粒を少し含み粗い。口縁部は玉縁状に成形され、体部は内湾して斜め上方へ立ち上がる。体部内面には縦位に突起を貼り付ける。体部下端は平坦面を持つ。体部外面には、後述のように波状の櫛描文を横位に施した粘土板を貼り付けている。体部下端面を除いて全体にスヌが付着しており、器壁の細部は判然としない。なお、断面の粘土接合痕からみた本品の成形過程は次のとおりとみられる。1) 口縁部の玉縁部と本体を成形したのち、2) さらに体部外面に、波状の櫛描文を施した横長の粘土板を貼り付け、3) 粘土板接合部の上下をなでつけて平滑にする。

86は土師質土器の上置である。口縁部から体部下端までの小片が残る。色調は淡灰橙色で、胎土は砂粒を少し含みやや粗い。口縁端部上面は平坦で、外面に粘土を貼り付けて二段の玉縁状とする。体部はわずかに外反して斜め上方へ立ち上がる。体部内面には縦位に突起を貼り付ける。体部下端は平坦面を持つ。本品は施文がなく、スヌの付着もみられない。

87はノップ碍子である。完形である。白色釉を施釉するが底部外面は無釉である。中央縦に径7mmの穴を穿孔する。なお、ノップ碍子は低圧屋内配線工事のうち碍子引き工事に使用され、電線を木材等の造営材から隔離・配線するための材料である⁽²⁰⁾。

88は軒丸瓦である。右巴文で、珠文4つが遺存する。内圈線はない。

89は凹基無茎式石鏃である。サヌカイト製で側辺はおおむね直線状である。逆刺はもともと左右対称であったものが折れて非対称となっている。基部の削り込みは深い。風化が進み表面は白っぽい。本品は、隣接地での既往の調査成果⁽²¹⁾やその形状、風化の度合いからみて縄文時代の所産とみられる。

90はサヌカイトの剥片である。頂端に2ヶ所ネガティブルブルを認める。末端は未調整である。背面の上半部には母岩の自然面が残っている。風化が進み表面は白っぽい。

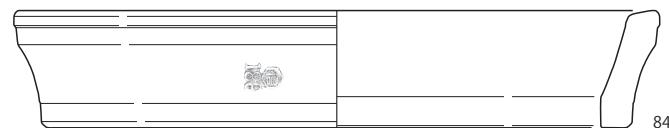
91は寛永通宝である。全体の3/5が残る。本品は銅製で、新寛永通宝文錢とみられる

機械掘削 (1)

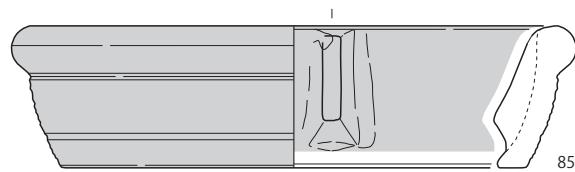


第19図 出土遺物実測図6 1:4

機械掘削(2)・石製品・錢貨



84



85

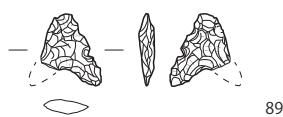


86

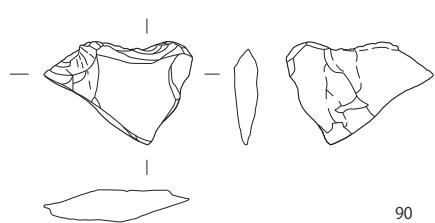


88

0 (S=1/4) 20cm

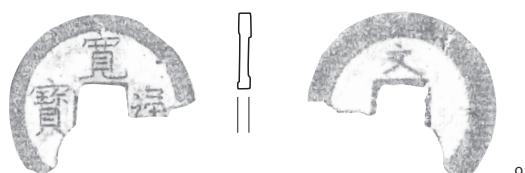


89



90

0 (S=1/2) 5cm



91

0 (S=1/1) 5cm

第20図 出土遺物実測図7 84～88 1:4 89・90 1:2 91 1:1

注釈

参考文献

- (1)『新修 摂津市史 第二巻』769-770 ページ
- (2)久保木 真人「明治期における日本陶磁器の装飾技法(I) : 銅版転写」(『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』20 1982 年)
- (3)本品の名称と部位は 淡路瓦工業組合『淡路瓦設計・施工ガイドブック』2006 に掲った
- (4)吹田市博物館『博物館だより』17 2001
- (5~7)小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」((財)京都市埋蔵文化財研究所『研究紀要』3) 1996
- (8)中野晴久「東海諸窯」(日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』) 2022
- (9)(10)大宰府教育委員会『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』2000
- (11~15)佐藤亜聖「東播系須恵器」(日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』) 2022
- (16)重根弘和「備前」(日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』) 2022
- (17)芦田淳一「正倉院正倉屋根瓦の編年と資料的価値」(宮内庁正倉院事務所『正倉院紀要』42) 2020
- (18)高橋照彦「綠釉陶器」(中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』) 1995
- (19)久保木 真人「明治期における日本陶磁器の装飾技法(I) : 銅版転写」(『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』20) 1982 年
- (20)参考資料(公社)日本電気技術者協会 HP「電気設備技術基準・解釈の解説〔その7〕電気使用場所の施設の規制(その2) 低圧屋内配線の工事方法」<https://jeea.or.jp/course/contents/11107/> なお近年はケーブル配線の普及により、碍子引き工事はあまり使われていない手法という(参考資料(有)凱電工 HP「ノップ碍子配線」)
- (21)大阪府教育委員会『千里丘遺跡群発掘調査概要』2006 同『千里丘遺跡』2008 同『千里丘遺跡II』2009

第3表 遺物一覧表

寸法()は復元

図版番号	種別	器種	口径 長さ	寸法(cm) 器高 幅	底径 厚さ	調整	色調	備考
1	土師器	高坏脚部		(2.85)		内面:不明 外面:不明	内面:明褐灰 外面:にぶい黄橙	
2	瓦器	椀	(14.0)	(1.3)		内面:ミガキか 外面:ヨコナデ	内面:灰 外面:灰	和泉型 IIIか
3	瓦器	椀	(13.2)	(0.9)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	内面:灰 外面:黒褐	和泉型 IIIか
4	瓦器	椀		(1.2)	(5.0)	内面:ミガキか 外面:ヨコナデ	内面:灰 外面:暗灰	楠葉型か
5	磁器	染付碗	(11.0)	(3.7)		内面:施釉(染付) 外面:施釉(染付)	内面:灰白 外面:灰白	
6	瓦器	椀	(12.2)	(2.5)		内面:マメツ、沈線 外面:マメツ	内面:灰白 外面:灰白	楠葉型 III?
7	瓦器	椀底部		(0.7)	(2.4)	内面:マメツ 外面:マメツ	内面:灰白 外面:灰白	和泉型
8	土師器	小皿	(8.15)	(1.0)		内面:ヨコナデ、ナデ 外面:ヨコナデ、ナデ	内面:にぶい橙 外面:浅黄橙	
9	磁器	皿	15.7	3.35	6.6	内面:施釉 外面:施釉、ユビナデ、露胎	内面:灰白、紫黒、黒褐 外面:灰白	外面に櫛状工具による、崩れた斜格子文?
10	磁器	皿	(15.6)	2.9	(9.4)	内面:施釉(染付) 外面:施釉	内面:灰白 外面:灰白	
11	磁器	皿	(12.9)	2.95	(7.4)	内面:透明釉 外面:透明釉、露胎	内面:白 外面:白	
12	磁器	皿	(12.7)	2.6	7.2	内面:施釉 外面:施釉、口銹	内面:明緑灰 外面:明緑灰	銅板転写による図柄
13	磁器	皿	(12.7)	1.9	(7.9)	内面:型押し、透明釉 外面:透明釉、露胎	内面:白 外面:白	
14	陶器	小壺	(4.4)	5.2	4.4	内面:施釉 外面:施釉、ケズリ	内面:灰白、オリーブ黄 外面:灰白、オリーブ黄	
15	土師質土器	七輪の上置		(5.5)	(15.7)	内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ、沈線	内面:橙、にぶい黄橙 外面:にぶい黄橙	
16	土師質土器	七輪の上置	(28.6)	7.45	(24.7)	内面:ヨコナデ、スヌ 付着 外面:ヨコナデ、ハケ、 沈線	内面:黒 外面:暗赤褐	
17	ガラス	瓶	9.95	5.7	0.2		内面:透明 外面:透明	内部に付着物有り
18	ガラス	瓶	9.9	6.5	5.0/0.35		内面:緑 外面:緑	
19	瓦	一文字軒瓦	(7.7)	(14.8)	2.2	内面:平行ナデ、ナナ メナデ 外面:ナデ	内面:灰白 外面:灰白	大正期~昭和41年までの稼働の業者
20	瓦	紐伏間瓦	(17.1)	(11.6)	1.8~3.9	内面:ナデ、面取り 外面:ナデ、面取り	内面:灰 外面:灰	
21	土師器	皿	(10.2)	(1.8)		内面:ヨコナデ、ナデ 外面:ヨコナデ、ナデ	内面:灰白 外面:灰白	京都系
22	土師器	皿	(8.0)	(1.6)		内面:ヨコナデ、ナデ 外面:ヨコナデ、ナデ	内面:灰白 外面:灰白	伊野分類 Iタイプ(Ia)
23	土師器	へそ皿?	(7.25)	(1.6)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ、ユビ オサワ	内面:橙 外面:浅黄橙	京都系土師器 へそ皿か?
24	土師器	へそ皿	(6.8)	(1.7)		内面:マメツ 外面:マメツ	内面:にぶい褐 外面:明褐灰	京都系
25	土師器	皿	(8.7)	(1.4)		内面:ヨコナデ、ナデ 外面:ヨコナデ、 不調整	内面:橙 外面:にぶい橙	内外面薄くスヌ付着?
26	土師器	皿	(8.5)	(0.95)		内面:ヨコナデ、ナデ 外面:ヨコナデ、 不調整	内面:灰白 外面:灰白	
27	瓦器	椀	(13.8)	(1.5)		内面:ヨコナデ、ナデ 外面:ヨコナデ、ナデ	内面:暗灰 外面:暗灰	
28	瓦器	椀	(13.9)	(1.45)		内面:ヨコナデ、ナデ 外面:ヨコナデ、沈線、 ナデ	内面:灰白 外面:灰白	和泉型
29	瓦器	椀	(9.9)	(1.6)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ、ナデ	内面:灰白、灰 外面:灰白、灰	和泉型 IV
30	瓦器	椀		(1.1)	(3.0)	内面:マメツ 外面:マメツ	内面:灰白 外面:灰白	和泉型 III末~IV
31	陶器	瓶子頭部 (花瓶か)		(4.3)		内面:施釉、素地 外面:施釉	内面:灰白 外面:灰白	古瀬戸(中期か)
32	陶器	碗		(1.7)	(5.3)	内面:施釉 外面:ヨコナデ	内面:にぶい黄 外面:灰白	古瀬戸 後期 平碗か

第3表 遺物一覧表

寸法()は復元

図版番号	種別	器種	寸法(cm)			調整	色調	備考
			口径 長さ	器高 幅	底径 厚さ			
33	磁器	碗	(17.0)	(2.4)		内面：施釉 外面：施釉、無鈷蓮弁文	内面：オリーブ 外面：オリーブ	
34	青磁	碗	(14.8)	(2.6)		内面：施釉 外面：施釉	内面：明緑灰 外面：明緑灰	
35	陶器	器		(3.4)		内面：施釉 外面：施釉、沈線、露胎	内面：灰白 外面：灰白	第2回目掘削、白磁碗 IV類
36	陶器	皿		(1.0)	(2.0)	内面：施釉、圈線 外面：施釉	内面：浅黄橙 外面：灰白	
37	土師器	甕		(2.0)		内面：マメツ 外面：マメツ	内面：浅黄橙 外面：にぶい黄橙	布留式甕？
38	瓦質土器	土釜		(4.05)		内面：ハケ(マメツ気味) 外面：ヨコナデ	内面：灰白 外面：灰	
39	陶器	甕底部		(3.75)		内面：散り釉 外面：ヨコナデ	内面：にぶい赤褐、オリー ブ灰 外面：にぶい赤褐	常滑？
40	磁器	碗	(9.8)	(2.95)		内面：透明釉 外面：透明釉、染付	内面：白 外面：白	
41	磁器	皿底部		(0.85)	(4.8)	内面：施釉 外面：施釉、圈線、露胎	内面：明緑灰 外面：明緑灰	肥前系？
42	磁器	器		(1.6)	(4.6)	内面：施釉 外面：ヨコナデ(露胎)	内面：灰白 外面：にぶい黄橙	
43	陶器	鉢？		(1.9)	(3.0)	内面：施釉、胎土目 外面：施釉、露胎	内面：灰白 外面：灰白、にぶい橙	唐津、見込みに胎土目
44	須恵器	擂鉢		(20.5)	(2.8)	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	内面：灰白 外面：灰、灰白	東播系
45	須恵器	擂鉢		(20.3)	(3.9)	内面：回転ナデ、ナデ、 ケズリ 外面：回転ナデ、ナデ	内面：灰白 外面：灰白	東播系
46	須恵器	擂鉢		(2.9)		内面：回転ナデ 外面：施釉、回転ナデ	内面：灰白 外面：暗灰、灰白	東播系
47	須恵器	擂鉢		(1.7)		内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	内面：灰白 外面：灰白、灰	東播系
48	須恵器	擂鉢		(2.6)		内面：ヨコナデ 外面：施釉、ヨコナデ、 ナデ	内面：灰白 外面：暗灰、灰白	東播系
49	陶器	擂鉢	(30.0)	(2.8)		内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ	内面：灰黄褐 外面：灰黄褐	備前 IV期
50	陶器	擂鉢		(4.2)		内面：擂目 外面：ヨコナデ	内面：橙 外面：橙	備前
51	須恵器	擂鉢		(4.0)		内面：擂目 外面：回転ナデ	内面：灰白 外面：灰白	備前
52	瓦	平瓦	(7.65)	(4.65)	1.65	内面：マメツ 外面：布目痕	内面：灰白 外面：灰白	
53	瓦	平瓦	(6.6)	(8.15)	1.35	内面：布目痕 外面：タタキ目	内面：灰 外面：暗灰	
54	瓦	平瓦	(8.3)	(5.3)	1.85	内面：マメツ 外面：面取り、マメツ	内面：灰 外面：灰	
55	瓦	平瓦	(8.9)	(8.6)	2.3	内面：布目痕？ 外面：マメツ	内面：灰白 外面：暗灰	
56	須恵器	甕体部片		(4.0)		内面：同心円タタキ 外面：格子状タタキ	内面：灰 外面：灰	第2遺構面 ベース土 5C代 か
57	土師器	小皿	(8.5)	(1.2)		内面：ヨコナデ、ナデ 外面：ヨコナデ、ナデ	内面：浅黄橙 外面：灰白	第2遺構面 ベース土
58	土師器	小皿	(8.5)	(1.2)		内面：ヨコナデ、ナデ 外面：ヨコナデ、ナデ	内面：灰白 外面：灰白	第2遺構面 ベース土
59	土師器	小皿	(6.0)	(1.1)		内面：マメツ 外面：マメツ、ヨコナ デか？	内面：淡橙 外面：淡橙	
60	瓦器	椀	(14.5)	(1.2)		内面：ヨコナデ、ナデ 外面：ヨコナデ、ナデ	内面：灰 外面：灰	第2遺構面 ベース土 瓦器椀 III期？ 和泉型
61	瓦器	椀	(13.3)	(1.3)		内面：ヨコナデ、ナデ 外面：ヨコナデ、ナデ	内面：灰白 外面：浅黄橙	和泉型 III～IV期？
62	瓦器	椀	(14.1)	(1.2)		内面：ヨコナデ、暗文、 ナデ 外面：ヨコナデ、ナデ	内面：灰 外面：灰	第2遺構面 ベース土 III期？ 和泉型
63	瓦器	椀	(13.3)	(2.9)		内面：ヨコナデ、ナデ 外面：ヨコナデ、ナデ	内面：灰白 外面：灰白	第2遺構面 ベース土 III期？ 和泉型
64	瓦器	椀		(1.25)	(4.8)	内面：ナデ 外面：ナデ、ヨコナデ	内面：灰白 外面：灰白	第2遺構面 ベース土 III期？ 和泉型
65	瓦器	椀		(1.2)	(3.9)	内面：ナデ 外面：ナデ、ヨコナデ	内面：浅黄橙 外面：浅黄橙	吸着炭素残っていない III期 和泉型

第3表 遺物一覧表

寸法()は復元

図版番号	種別	器種	口径 長さ	寸法(cm) 器高 幅	底径 厚さ	調整	色調	備考
66	瓦器	椀		(1.4)	(7.8)	内面:ナデ 外面:ナデ、ヨコナデ	内面:灰 外面:灰	緑釉椀か?
67	瓦	平瓦	(12.15)	(8.75)	1.9	内面:タタキ痕 外面:布目痕	内面:灰 外面:灰	第2遺構面 ベース土
68	瓦	平瓦 (狭端部片)	(6.0)	(5.5)	1.9	内面:タタキ 外面:ナデ、面取り	内面:灰 外面:灰	
69	瓦	丸瓦	(5.8)	(4.85)	1.9	内面:布目痕 外面:ナデ	内面:灰 外面:灰	第2遺構面 ベース土
70	瓦	丸瓦	(8.4)	(7.9)	2.1	内面:布目 外面:工具ナデ	内面:明黄褐 外面:にぶい黄橙	
71	須恵器	壺蓋		(1.0)		内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、回転 ケズリ	内面:灰白 外面:灰白	機械掘削
72	須恵器	有蓋高壺の 脚・端部		(1.7)		内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	内面:灰白 外面:灰	機械掘削、古墳時代
73	磁器	碗	(12.7)	(2.55)		内面:施釉 外面:施釉	内面:明緑灰 外面:明緑灰	機械掘削
74	磁器	碗	(10.6)	(4.55)		内面:施釉、染付(園線、 雷文) 外面:施釉、染付(園 線等)	内面:明緑灰 外面:明緑灰	機械掘削
75	磁器	湯呑	(8.7)	(4.1)		内面:透明釉 外面:透明釉、染付	内面:灰白 外面:灰白	機械掘削
76	磁器	蓋	(4.2)	(1.3)		内面:施釉、染付(園線、 草花)、露胎 外面:施釉、染付(園線、 露胎)	内面:明緑灰 外面:明緑灰	機械掘削
77	磁器	碗		(3.65)	4.2	内面:施釉、染付(五 弁花) 外面:施釉、染付(園線、 波文)、露胎	内面:明緑灰 外面:明緑灰	機械掘削
78	陶器	湯呑	(5.7)	6.6	3.5	内面:透明釉 外面:透明釉、園線3 本赤・青	内面:灰白 外面:灰白	機械掘削
79	陶器	湯呑	(5.9)	6.5	3.4	内面:施釉 外面:施釉	内面:灰白 外面:灰白	機械掘削
80	陶器	容器 (小型の鉢か)	(9.9)	(5.9)		内面:透明釉 外面:透明釉、露胎	内面:にぶい黄橙、緑灰 外面:にぶい黄橙、緑灰	機械掘削
81	土師質土器	容器底部		(5.95)	(15.9)	内面:ハケ、ヨコナデ 外面:ヨコナデ、ケズ リナデ、離砂	内面:にぶい褐 外面:暗灰	機械掘削
82	陶器	羽釜	(24.9)	(7.85)		内面:露胎、施釉 外面:施釉、露胎、ス ス付着	内面:にぶい橙 外面:にぶい赤褐	機械掘削
83	陶器	鍋	(18.45)	(6.2)		内面:施釉 外面:施釉、ナデ、ハケ	内面:黒褐 外面:黒褐	機械掘削
84	土師質土器	七輪の上置	(33.6)	6.2	30.6	内面:ナデ、ヨコナデ 外面:ヨコナデ	内面:灰白 外面:灰白	外面に印有り、機械掘削
85	土師質土器	七輪の上置	(27.75)	7.5	(24.1)	内面:ヨコナデ、ナデ 外面:ヨコナデ、沈線、 波状文	内面:黒褐 外面:赤黒	
86	土師質土器	七輪の上置		5.7		内面:ヨコナデ、一部 指サエ 外面:ヨコナデ	内面:橙 外面:橙	機械掘削
87	磁器	ガイシ (碍子)	5.05	3.5	1.3	内面:透明釉、露胎 外面:透明釉、露胎	内面:灰白 外面:灰白	機械掘削
88	瓦	軒丸瓦	(7.75)	2.0	2.25	内面:ナデ、ヨコナデ 外面:殊文、巴	内面:灰 外面:灰	機械掘削、殊文4ヶ残存、巴1ヶ残 存
89	石器	凹基無茎式 石鏃	(1.9)	(1.6)	0.4			サヌカイト
90	石器	剝片						
91	銭	寛永通宝 (文銭)	2.6	0.15		内面:寛永通宝 外面:文		材質「銅」

第5章 まとめ

今回の発掘調査で検出された遺構は、土坑、溝、落ち込み、ピットであった。建物跡が想定されるような柱穴の検出はなかった。遺物包含層や遺構から検出された土器等は、小片で摩滅しており出土量は少なかった。これら遺構や遺物の状況から、江戸時代以前の人々の生活の場である集落ではなく、集落から離れた場所であったと思われる。また遺構面を覆う遺物包含層の下面は、ほぼ水平堆積で耕作土である可能性が高い。

今回の調査で精査し遺構を検出した面は3面であった。上層から第1遺構面は現状地盤からマイナス1m前後、第2遺構面は現状地盤からマイナス1.4mから1.5m前後、第3遺構面は現状地盤からマイナス1.5mから1.6m前後であった。

第1遺構面から検出された遺構は、ピット、土坑で上記のように建物跡は検出されなかった。遺物の検出状況から時代を特定することが非常に困難な状況であるが、概ね江戸時代以降に形成されたと考えられる。

第2遺構面から検出された遺構は、ピット、溝、落ち込みで第1遺構面と同様に建物跡はなく江戸時代の耕作土の堆積だと考えられる。

第3遺構面から検出された遺構は、ピット、溝、落ち込み、土坑で第1遺構面、第2遺構面と同様に建物跡はなく江戸時代までに形成された耕作土の堆積だと考えられる。

この3面は千里丘丘陵を削平しながら、整地し小さな区画から大きな区画へと開発されていく過程が検出されたものと考えられる。削平を受けており、また遺物が極端に少なかったことから、各遺構の時代を特定する事は困難であった。さらに調査面積も狭く、区画の全容を把握する事も困難であった。しかし各遺構（落ち込み・溝）の規格性や遺構同士の切りあい関係から区画の可能性が想定できる。

第1遺構面の全面において耕作土となった区画。

第2遺構面において南北に走る溝10が東西を分ける区画。削平されているが、落ち込みの範囲から想定される区画。

第3遺構面において落ち込みの土を掘削した後、地山に食い込んだ形で多数の細い溝が検出された。これらの溝群は鋤溝なのか里道の側溝の痕跡なのかの判断は難しい。しかし溝14～溝19は落ち込みの肩に並行して位置し、本来は2条の溝であった可能性が高く里道の側溝であった可能性が高い。これら里道の側溝と溝26・溝

28は同じく落ち込みの肩に並行して位置し、里道の側溝と直交する関係にある。この状況を勘案すると里道で区画された地割の可能性がある。

また第3遺構面においては、溝5、溝6が並行して位置し里道の側溝の可能性がある。また溝31～溝33も同じく里道の側溝の可能性がある。この2つの遺構群は、大きく北東から南西に傾き並行して走る位置関係にある。これら状況から上記の区画とは傾きが異なる区画であった可能性がある。

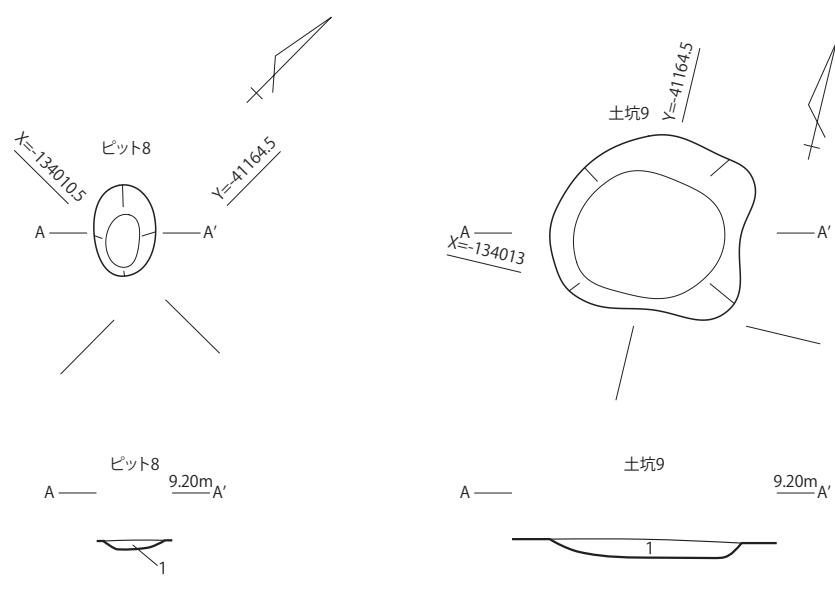
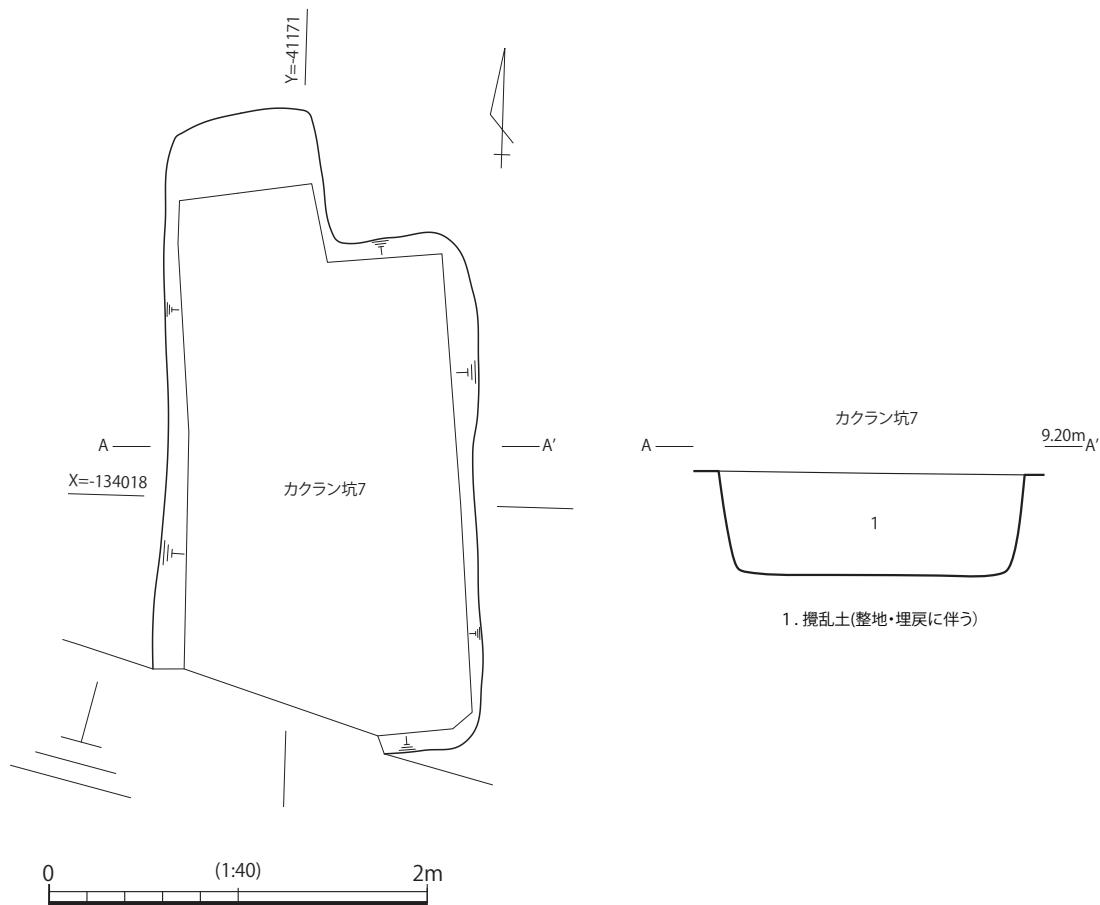
第2面で検出された落ち込みの区画と第3面の里道の区画の時期差はいずれも削平されているとの遺物が出土していないことから困難な結果となった。

以上は、あくまで遺構の規格性からの可能性であり各溝内で遺物の検出がなく時期差を特定することは難しい状況であった。

今回の発掘調査においては、平成17年度に大阪府教育委員会が実施した縄文時代の地層からサヌカイト剥片の集積と縄文土器が出土した調査の場所から非常に近い場所に位置しており、当初はサヌカイトや縄文土器が多量に出土する可能性が示唆されていた。結果的にこの調査では、近世の耕作土に紛れていたサヌカイト、石鎌が各1つずつの検出となった。

今回の発掘調査では、遺構・遺物について量的に多いという成果とは言えない状況であった。しかし落ち込みや溝などの遺構には、一定の規格性が見られ、当該地が江戸時代の耕地開発で改変されてきた土地区画の痕跡や耕作地周辺の里道と考えられる遺構が検出されたという成果があった。また遺物からは、千里丘駅が建設された前後の近代の生活道具が比較的良好に検出する事ができたという成果があった。

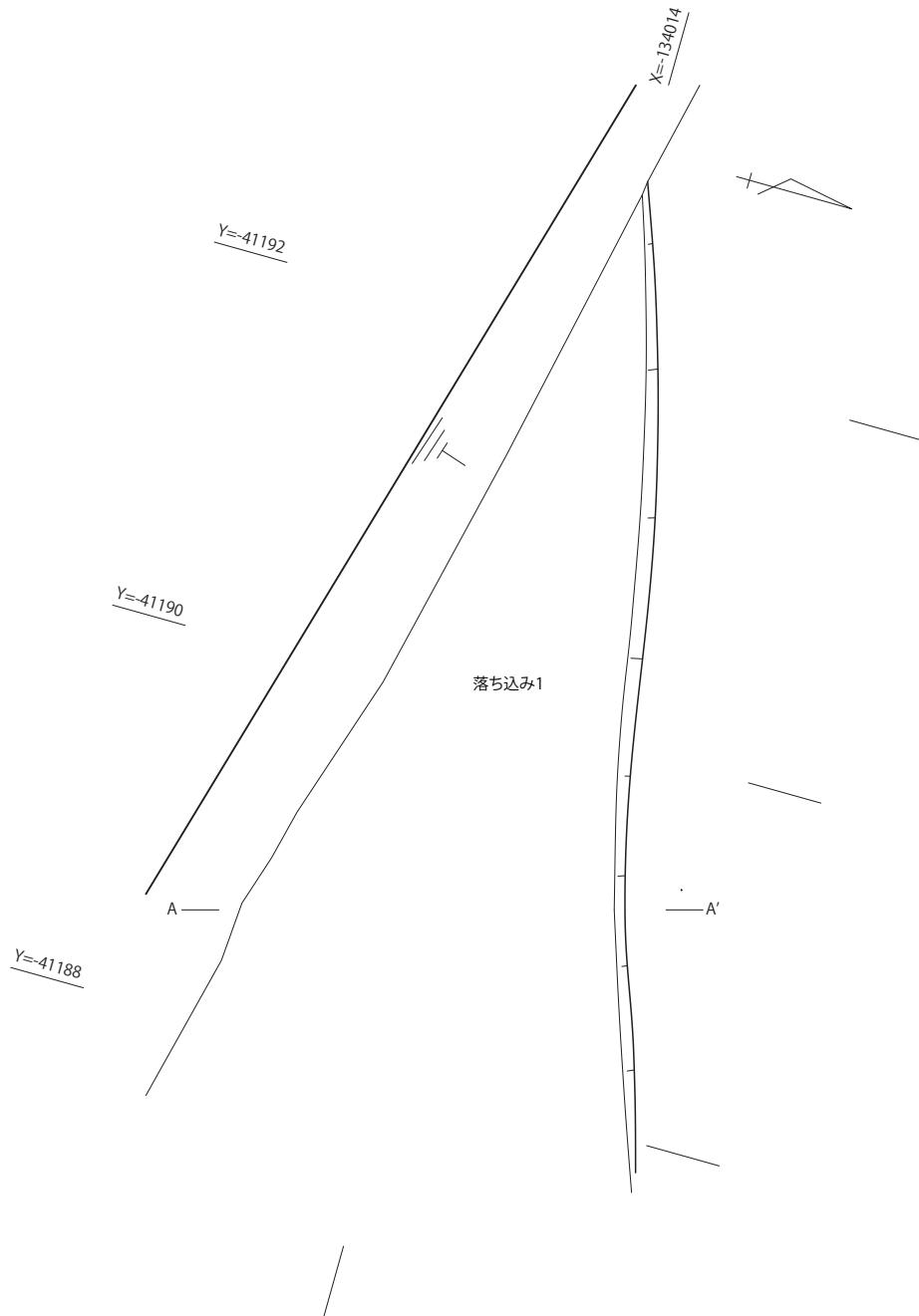
これらの調査の成果が、今後の周辺の開発に伴う発掘調査を進めていく中での一例となったものと思われる。



1. 7.5Y7/1 灰白色 砂質土 炭粒少量混

1. 7.5Y6/1 灰色 砂質土 炭粒少量混

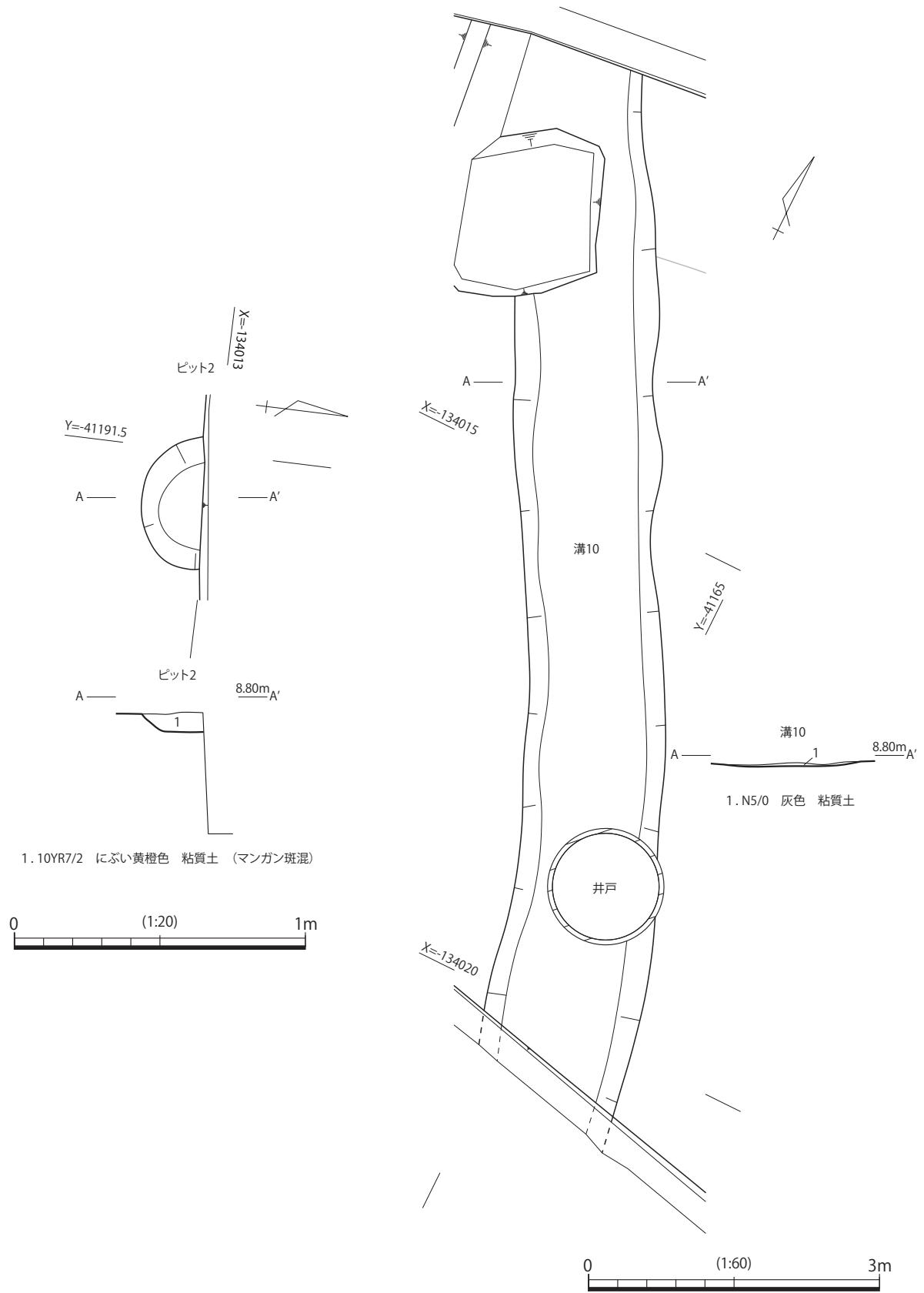
第21図 第1遺構面 カクラン坑7・ピット8・土坑9 1:20 1:40



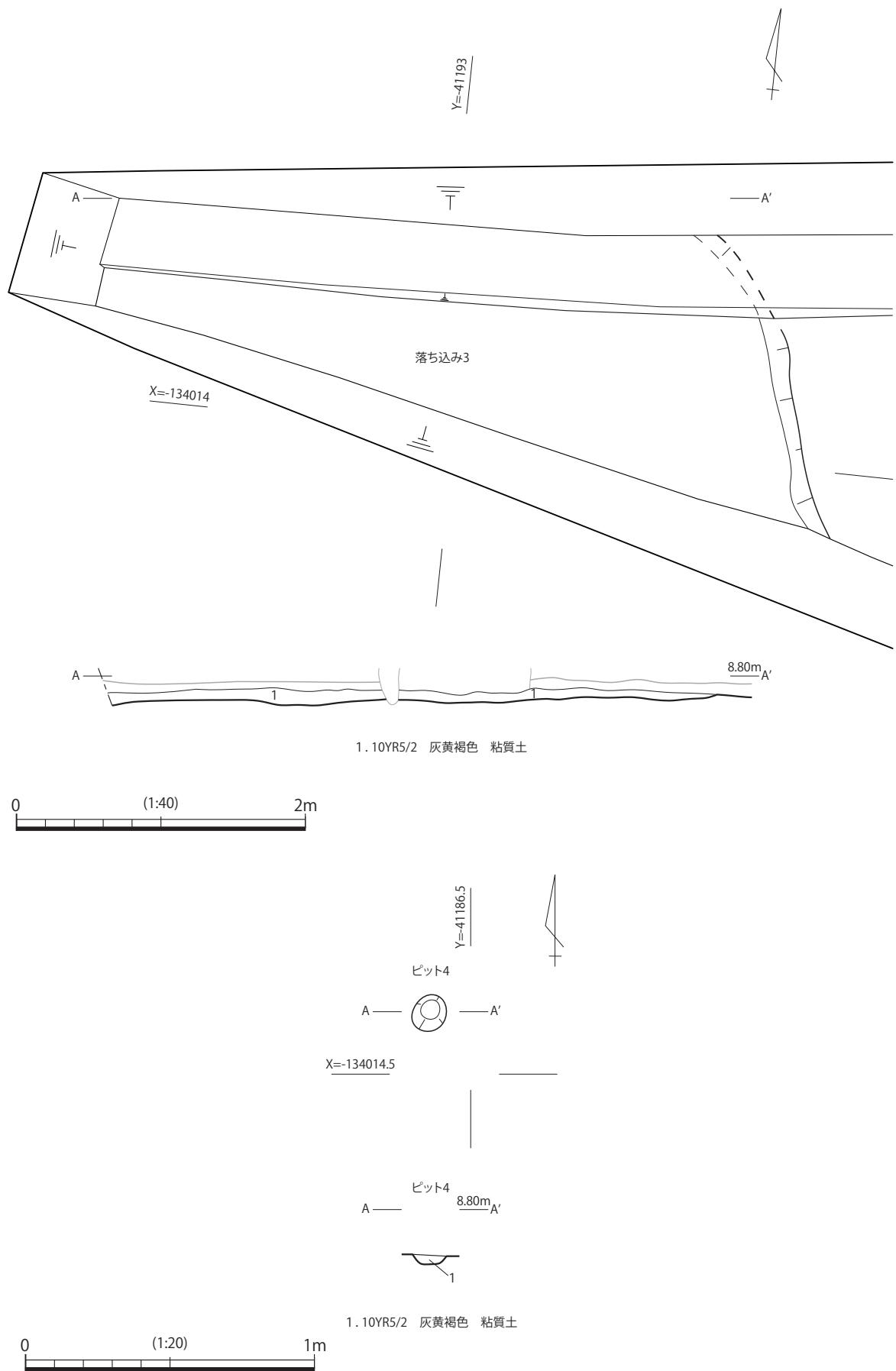
1. 2.5Y7/6 明黃褐色 粘質土



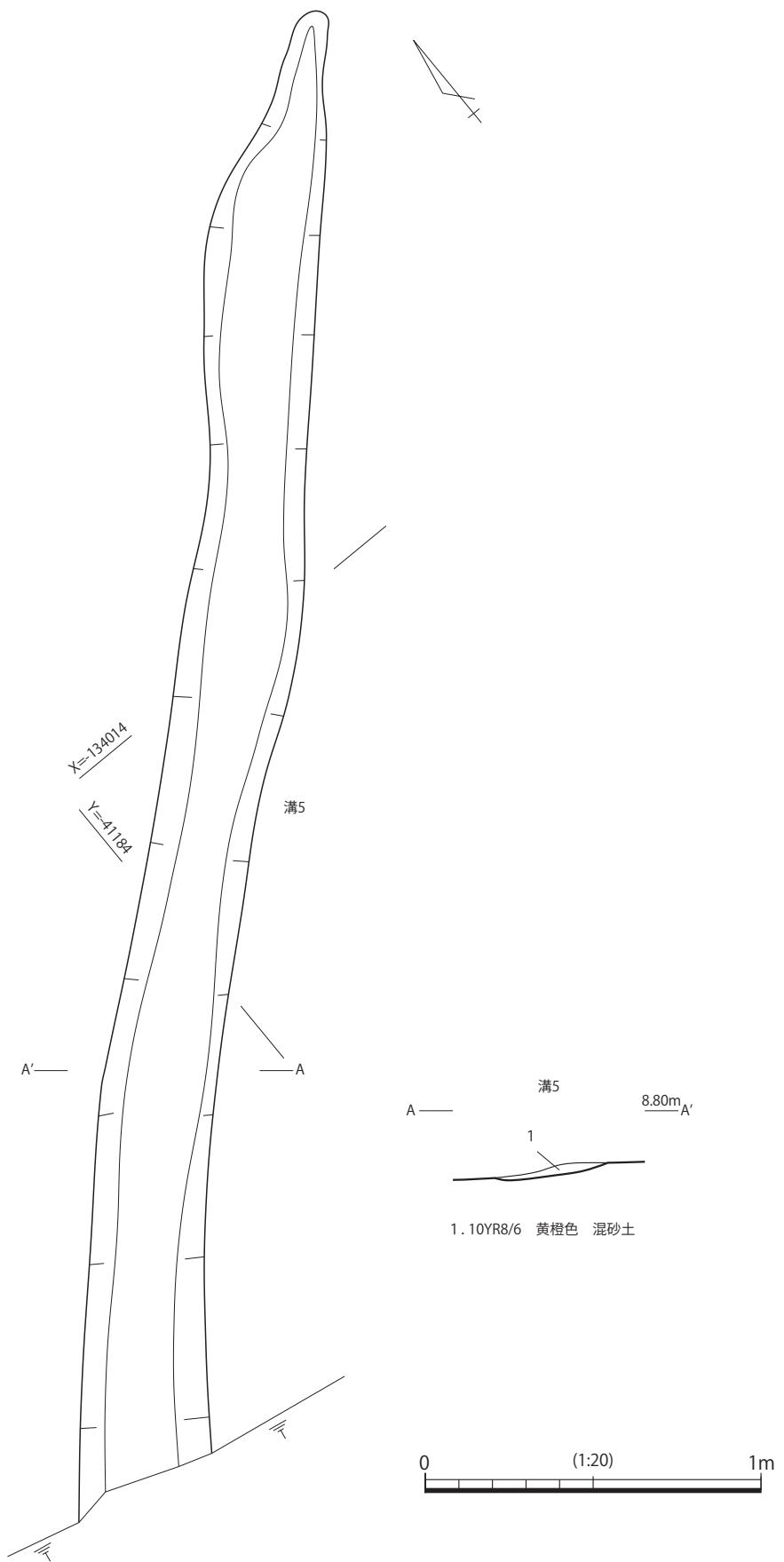
第22図 第2遺構面 落ち込み1 1:40

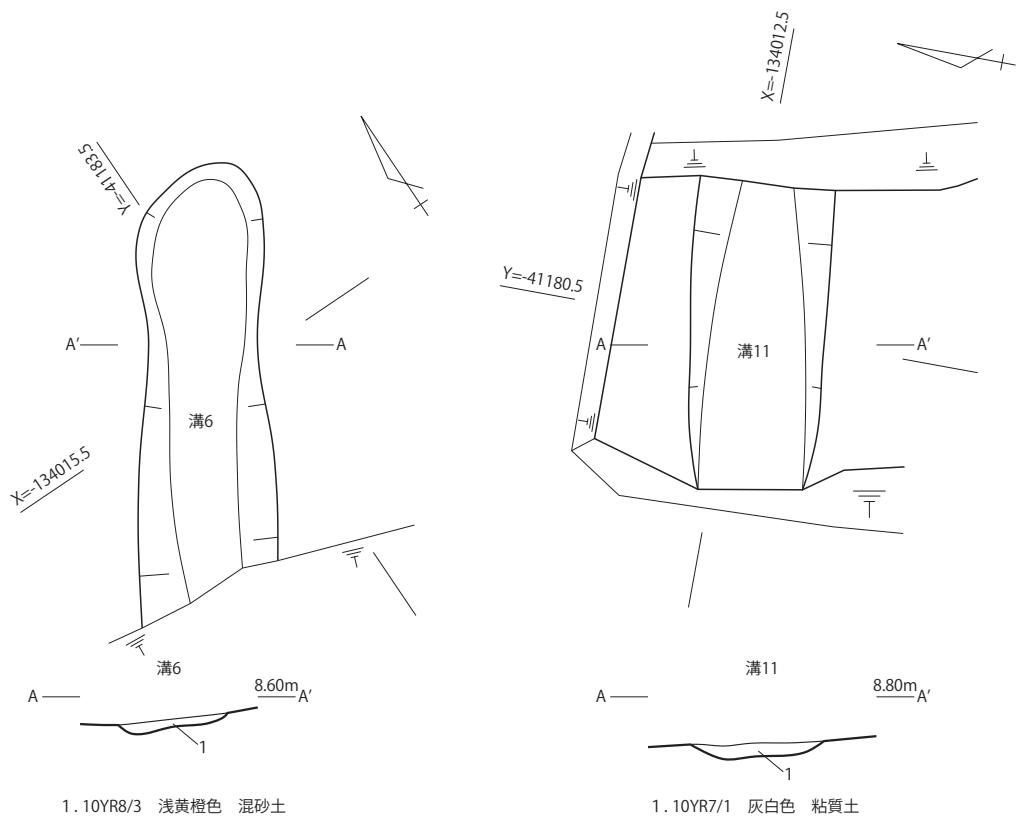


第23図 第2遺構面 ピット2・溝10 1:20 1:60

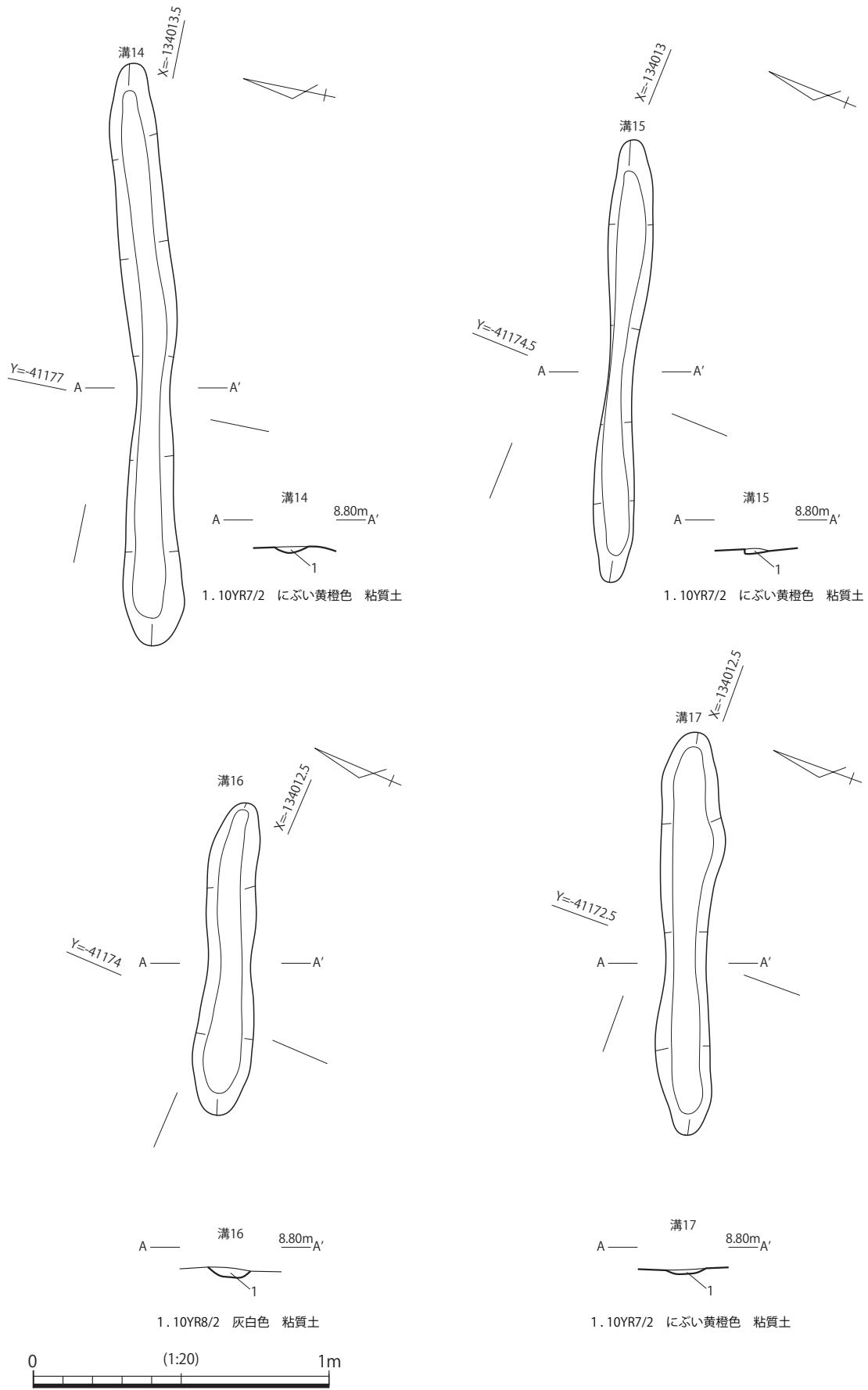


第24図 第3遺構面 落ち込み3・ピット4 1:20 1:40

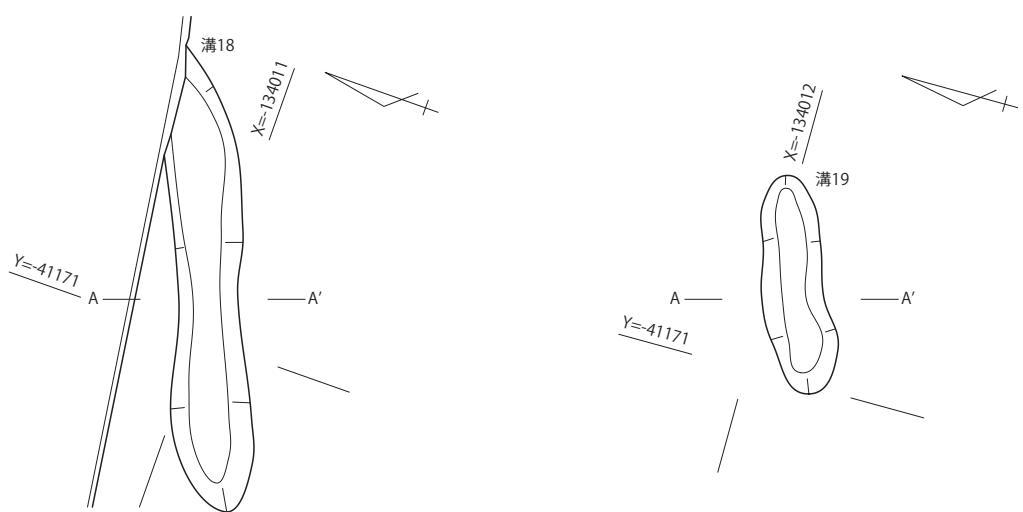




第26図 第3遺構面 溝6・11・12・13 1:20



第27図 第3遺構面 溝14・15・16・17 1:20

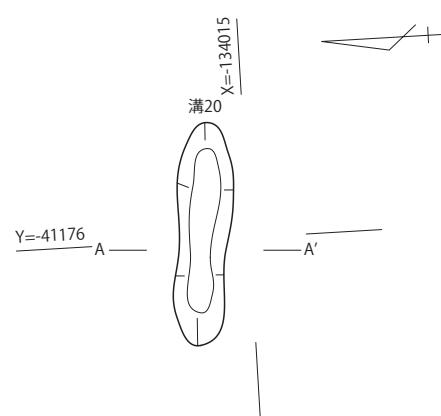


A — 溝18 8.80m A'

1. 10YR8/2 灰白色 粘質土

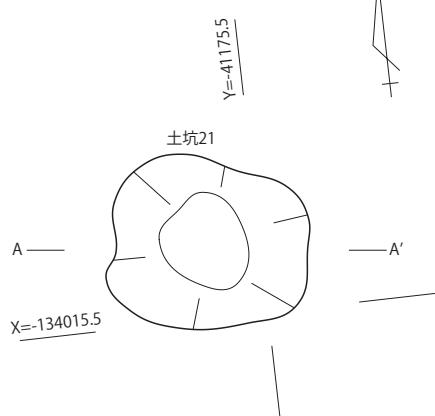
A — 溝19 8.80m A'

1. 10YR7/2 にぶい黄橙色 粘質土



A — 溝20 8.80m A'

1. 10Y7/2 灰白色 粘質土

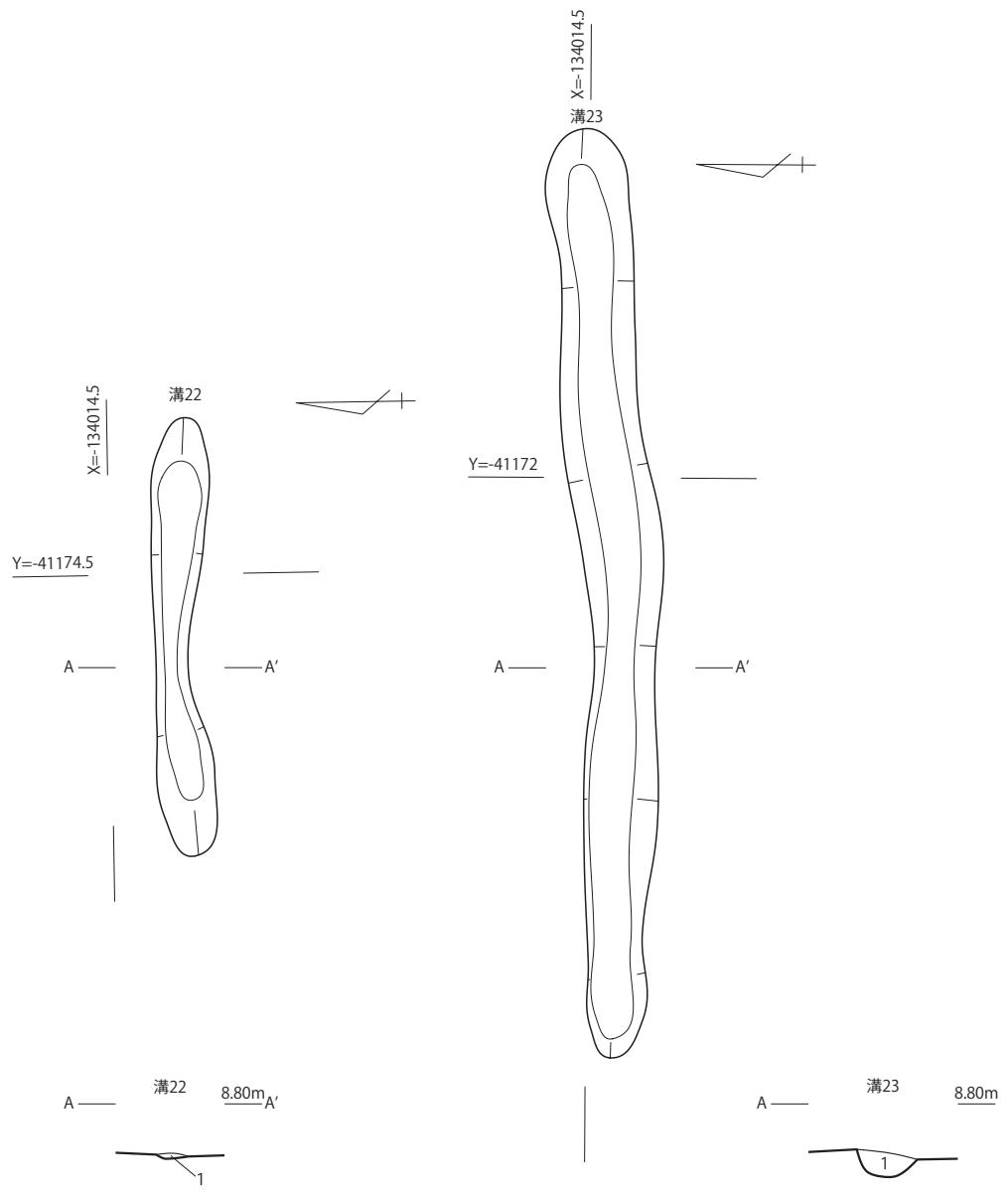


A — 土坑21 8.80m A'

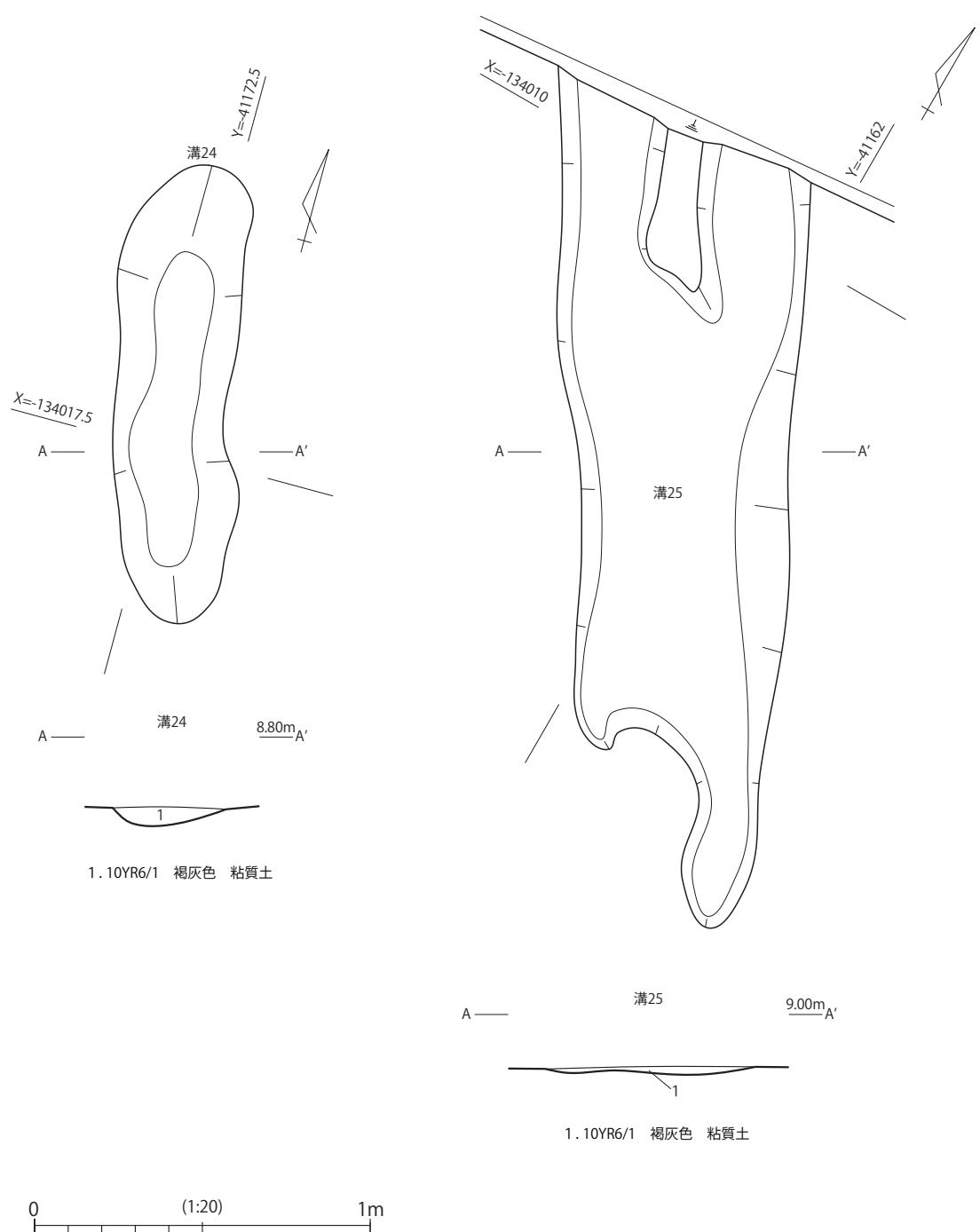
1. 10YR7/1 灰白色 粘質土



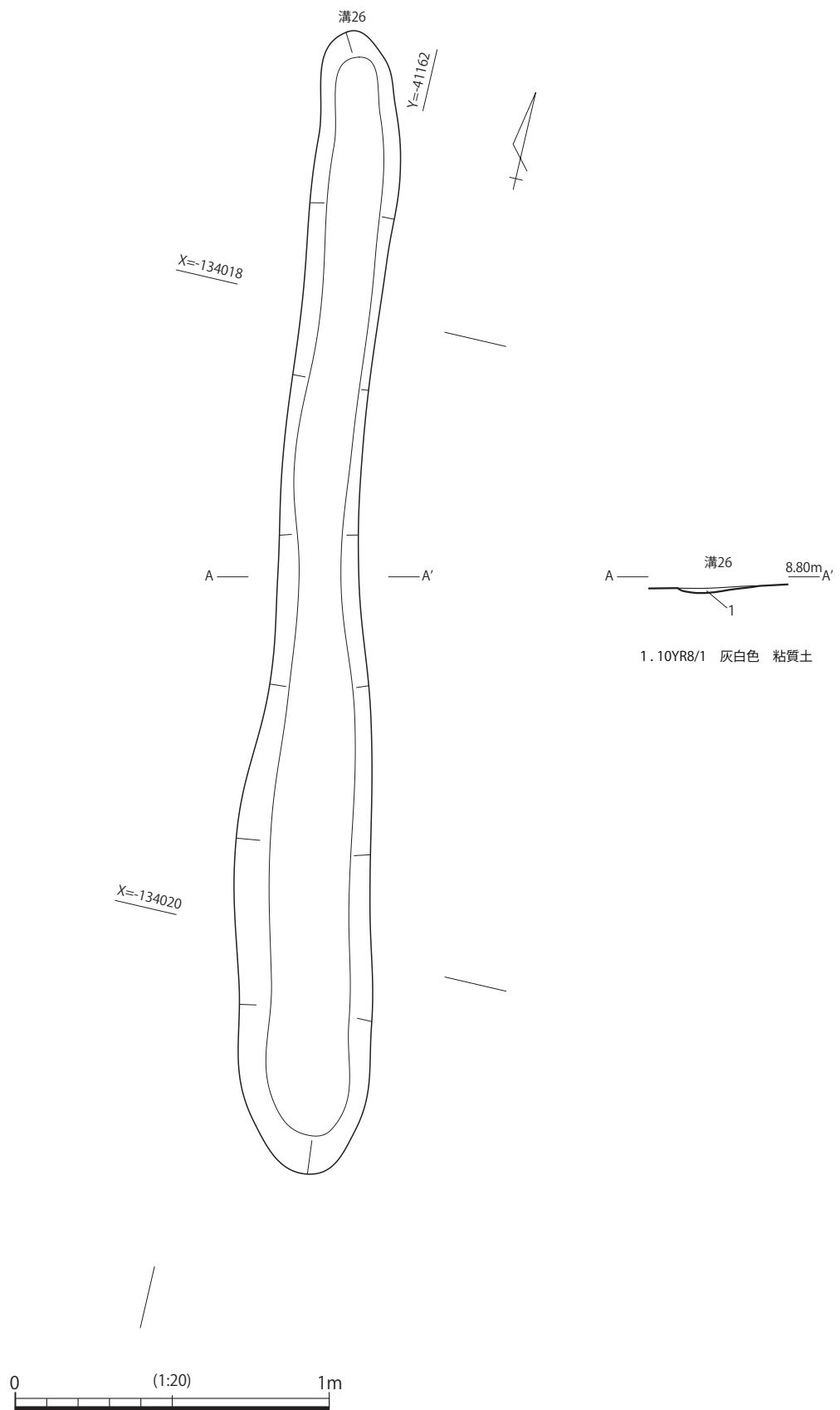
第28図 第3遺構面 溝18・19・20・土坑21 1:20



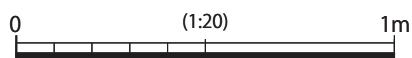
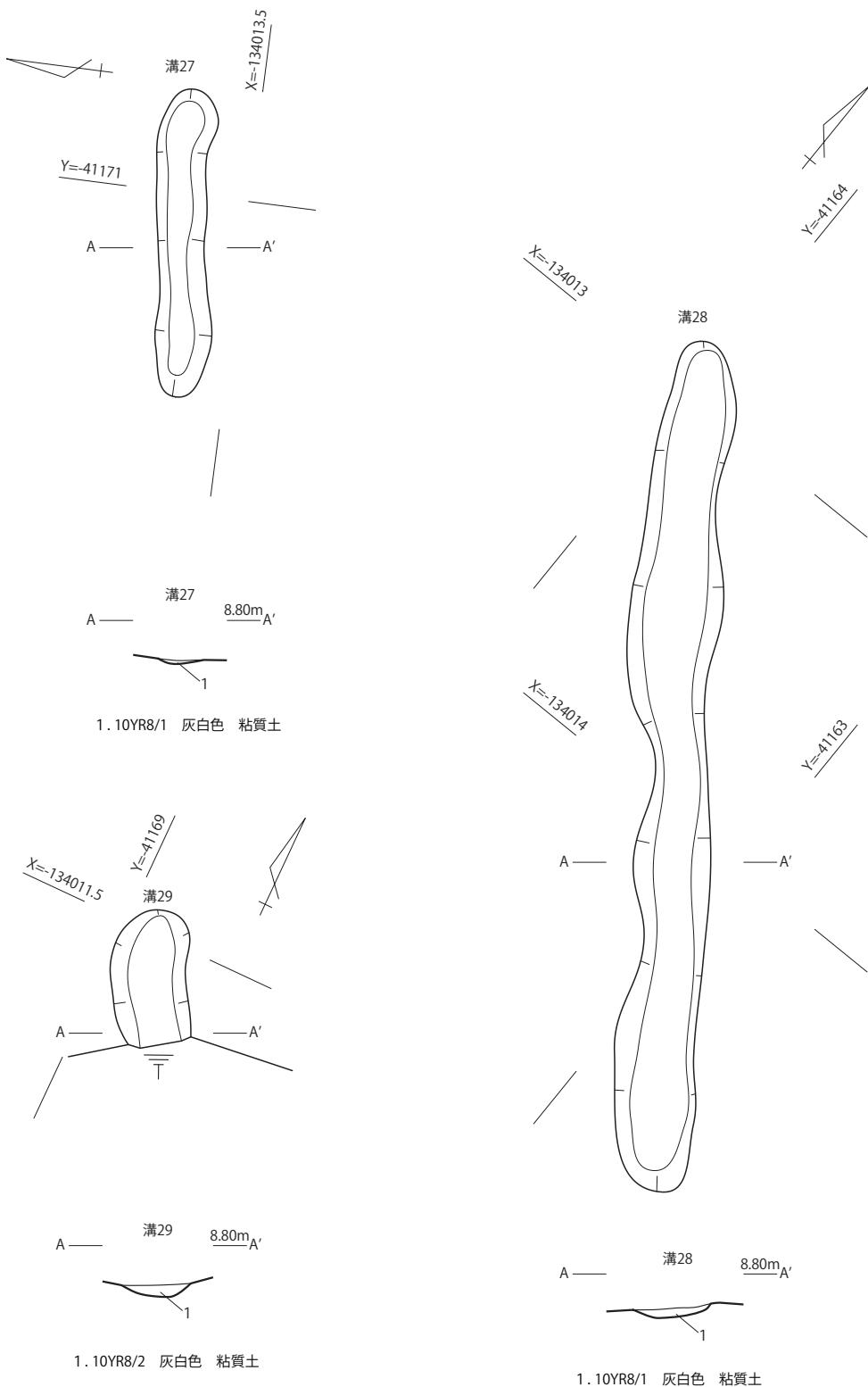
第29図 第3遺構面 溝22・23 1:20



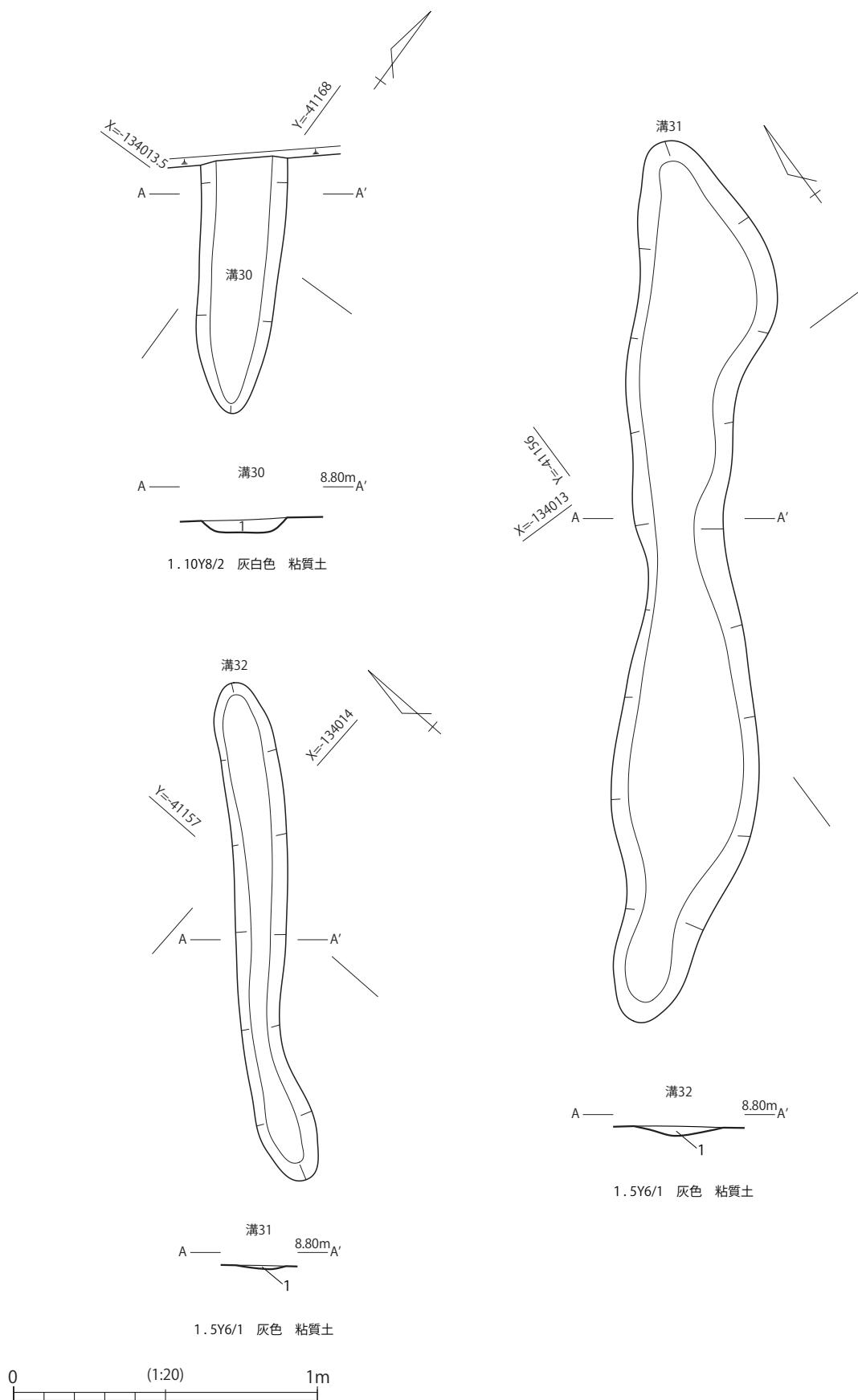
第30図 第3遺構面 溝24・25 1:20



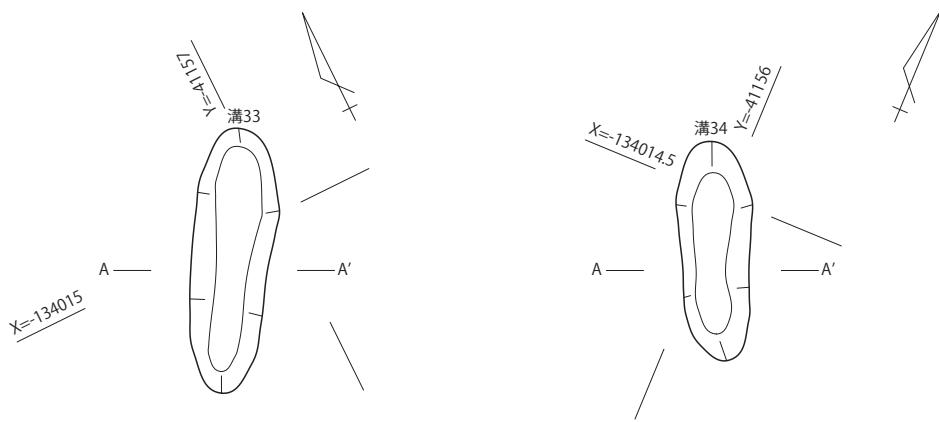
第31図 第3遺構面 溝26 1:20



第32図 第3遺構面 溝27・28・29 1:20



第33図 第3遺構面 溝30・31・32 1:20

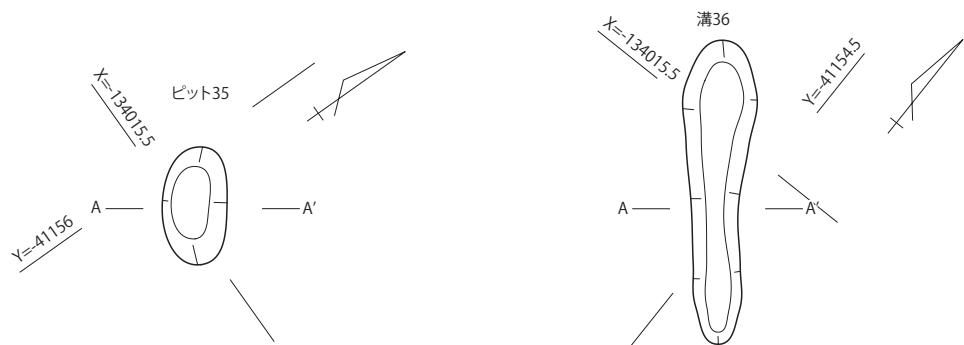


A — 溝33 8.80m A'

1.5Y6/1 灰色 粘質土

A — 溝34 8.80m A'

1.10YR6/1 褐灰色 粘質土



A — ピット35 8.80m A'

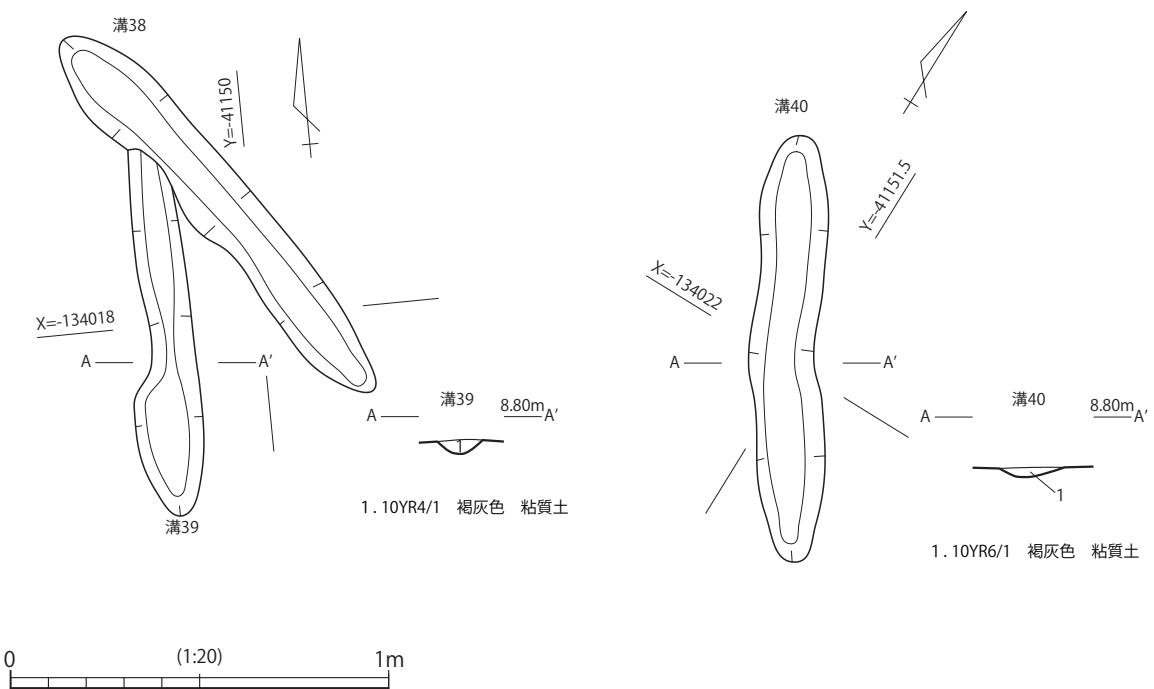
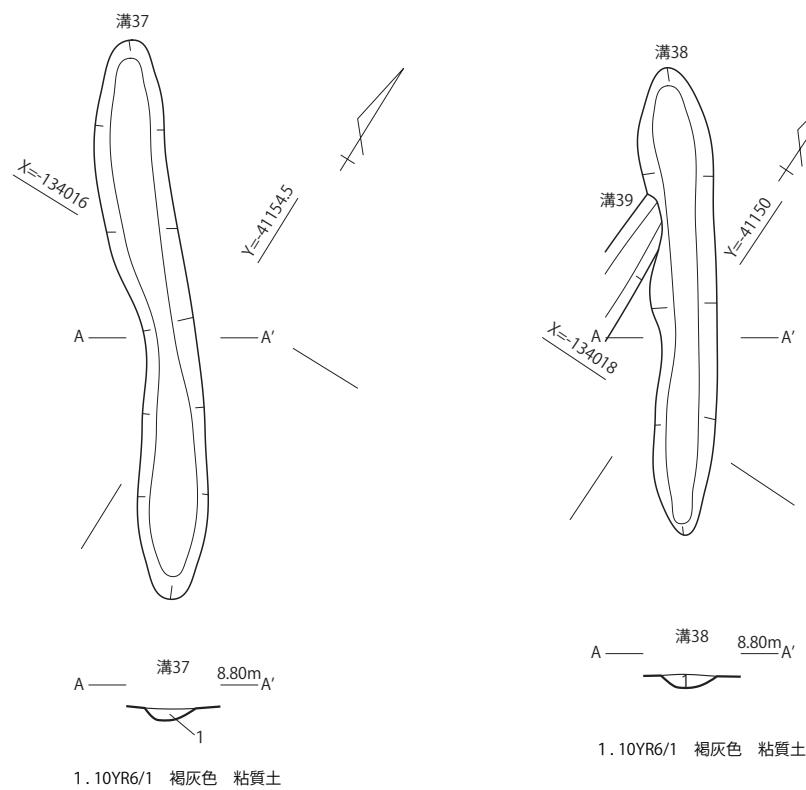
1.10YR6/1 褐灰色 粘質土

A — 溝36 8.80m A'

1.10YR6/1 褐灰色 粘質土

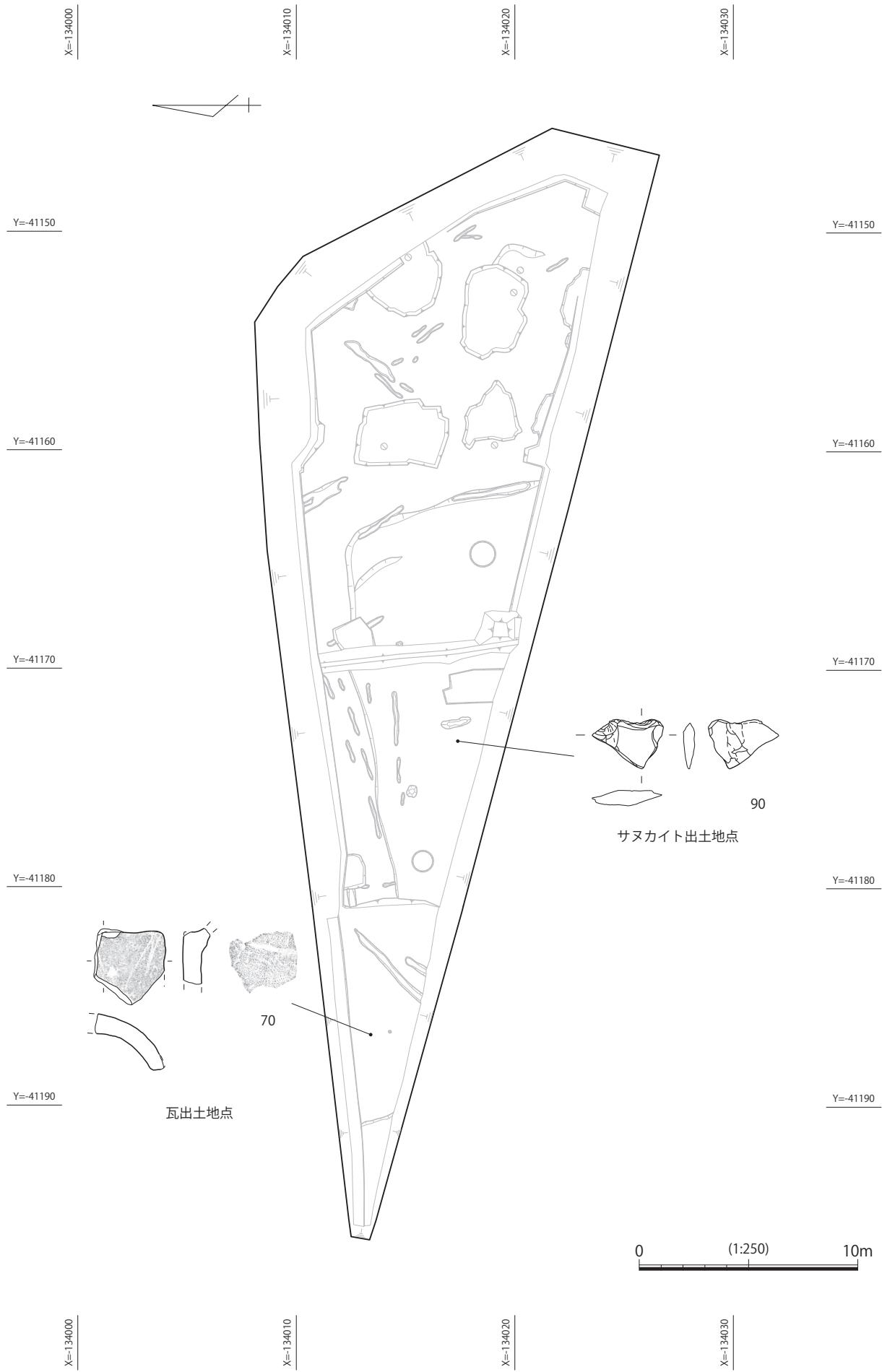
0 (1:20) 1m

第34図 第3遺構面 溝33・34・ピット35・溝36 1:20



0 (1:20) 1m

第35図 第3遺構面 溝37・38・39・40 1:20



第36図 瓦・サヌカイト出土地点 1:250

報告書抄録

千里丘遺跡

発行日 令和6（2024）年3月

編集・発行 摂津市教育委員会

〒566-8555 摂津市三島1丁目1番1号

株式会社 島田組

〒581-0034 大阪府八尾市弓削町南3丁目20番地2

印 刷 株式会社 近畿印刷センター